日本郭沫若研究会事務局
二〇一七年十二月二〇日発行

郭沫若研究会会報

第十八号（総No.19）

目　次

戯曲「屈原」におけるドラマトゥルギーの考察　……香月　隆／1
『女神』の再認識（下）　……魏　建著／岩佐昌暲訳／8
郭沫若の作詞したロマン・ロラン追悼歌「平和の光」について　……内田　知行／11
成仿吾の欧州行〔一〕　……成家　徹郎／13
郭沫若とタゴール　……上村　京子／20
冰心と郭沫若　……萩野　脩二／21
資料紹介――大正期の岡山における中国人留学生の生活　……劉　建雲／24
医学生と文学者　―　陳俐「郭沫若：在文学与政治背后的医学眼光」を読む　……横打　里奈／28
会員の新著を紹介する　……岩佐　昌暲／31
松宮貴之　著『中国の政治家と書』雄山閣
藤田梨那　著『詩人郭沫若と日本』武蔵野書院
郭沫若と釣魚城懐古について　……齊藤　孝治／33
執筆者紹介　……20

戯曲「屈原」におけるドラマトゥルギーの考察

香月　隆

郭沫若作 史劇「屈原」にたいする高評価

紙面を与えられたので、脚本家の立場から史劇「屈原」の考察を試みることにした。

「屈原」のあらすじを思い浮かべておきたい。

≪楚の三閭大夫の屈原は、斉国と同盟して秦からの侵略を防ごうとする。しかるに上官大夫の靳尚は、屈原の愛国政策に賛成を装いながら、秦の謀臣張儀とひそかに通じ、懐王の深く愛していた南后をもこの陰謀に加えた。宮庭の宴会の日、懐王の還御を知ると南后は急に倒れそうになり、「三閭大夫や、はやく、はやく……」と屈原に助けを求め、かれが南后を助けると、今度は「はやく、はやく手を放して」と叫びながら懐王にすがりついて泣き、屈原をあしざまに訴える。こうして屈原は気違いにされ、追放される。祖国の危機を前に屈原の胸は張り裂けんばかりで、「おとしいれたのはこの私をではない。それは中国全体をですぞ」と叫ぶが、だれも耳を貸そうとしない。靳尚の一味がかれは発狂したのだとふれ回ったからである。やがてその場にいあわせた者から屈原の潔白が明かされる。南后は、屈原を毒殺してかれの監禁されている廟を焼き払えと命令する。屈原は火のなかで絶叫し、そして脱走する……。≫（黎波・平凡社世界名作大辞典）

同記事で黎波は続ける。

≪「屈原」が恐怖政治下の国民党統治地区で上演されたとき、観衆はあらしの拍手（傍線は筆者）でこの抗議の戯曲を迎えた。当時の苦悩に満ちた現実は、屈原の悲劇を借りたこの鋭い告発に対して、敏感な共鳴を観衆に呼び起こした。「屈原」の舞台は、売国政権と戦うべく民衆を精神的に動員する激しい闘争の舞台となった。≫

あらしの拍手というのは、重慶における初演のことであろうか。第二次大戦後、「屈原」はソ連や日本でも上演されることになるが、多くが高い評価を受けたようである。だがいずれも抗日という時代背景を前提としての評価であった。今回、脚本家としてあらためて「屈原」を超時代、超プロパガンダの純粋芸術として再評価してみたい。

史劍の「屈原」批判

史劍（本名・馬彬。歴史小説家としては南宮搏とも）著「郭沫若批判」（１９５４ 香港・亞洲出版社）を開いてみた。過激な郭沫若批判を展開する同著のなかで、史劇「屈原」がどう評価されているかを知りたかったからである。多くの「屈原」賛美論と、史劍の「屈原」批判論を対比し、その中から新しい「屈原」観を止揚してみたいと思ったからである。

同書217ページから郭沫若の戯劇に関する批評文が掲載されている。

演劇に重要な導入部に関して史劍は次のように言う。（以下≪≫括弧内の日本文は鄭天妹訳による）

① ≪第一幕の幕が開くと、舞台の上に屈原が一人で座って、かれの「橘の歌」を詠む。この詩は長く、観客が理解できるはずがない；続いては、屈原と宋玉の大いなる議論だが、その時間は、第一幕の三分の一を占めている：そのあとは、屈原と靳尚との対話、これもまた長い議論だ。第一幕は、全くもってしらけている。≫

一般に「屈原」は史劇と称されているが、それにたいして史劍

は――。

② 《郭沫若は考証家であるが、かれが演劇の中で表現している中に、考証家としての精神は微塵もない。（中略）郭沫若は近代中国の屈原の主な研究者の一人だ。かれは屈原を熱狂的に崇拝し、屈原に関する文章も多数書いているが、演劇「屈原」の中では、かれの研究考証の腕前は発揮できていない。》

主人公屈原の性格についても史劇の評価は厳しい。

③ 《かれは舞台効果を出すために、屈原を本当に狂人の姿で登場させたが、劇の雰囲気としては、確かに「屈原」の中で最も成功している部分だ。（中略）屈原の性格はもともと内向的であって、暴風雨のような性格ではない。しかし、郭沫若は劇のなかで屈原の性格を変えてしまった。（中略）深い忠誠心を爆発型の革命精神に変えてしまい、かれの本来の性格から実に離れすぎている。》

史劇は「屈原」第五幕とシェークスピア「リア王」第三幕との相似を指摘した。

④ 《「リア王」の第三幕で、暴風雨のモノローグがあるが、郭沫若はそれを「屈原」の劇の中に加えた。（中略）以下、両者の意味が同じところが二十行あまりある。》

右の、史劇による「屈原」批判にたいして、私見は次の通りである。

① 史劇の説に同意したい。幕が開くと同時に「橘の歌」の朗詠がえんえんと始まるのは退屈至極である。郭沫若が下敷きに用いたと思われるシェークスピアのかずかずの劇では、幕開けの導入部がそれぞれ劇的魅惑に富んだシーンから始まっている。

② 「屈原」は史劇だが史劇の規定は難しい。歴史的事実にたいする忠実度の問題、芸術的創造性に関する自由の問題。つまり「史と詩」の境界線設定は判然と規定されていない。史劇の批判も正論だろうが、郭沫若の「屈原」における歴史描写も演劇論上あやまりとはいえない。

③ 郭沫若の執筆下で、社会的要請を担って誕生した主人公の屈原の性格設定を史劇が否定することは不当であろう。劇中の主人公、屈原の所有権は筆者郭沫若に属するからだ。

④ 具体的には「リア王」第三幕第二場と「屈原」第五幕第二場とにそっくりの台詞があることを史劇は指摘している。

「リア王」の左の部分を――

〈Lear　Blow, winds, and crack your cheeks! Rage, blow! You caratacts and hurricanoes, spout〉

「屈原」では――

〈屈原　風・你咆哮罷・盡力的咆哮吧……〉

と引きうつし、以下、「リア王」と相似の文が二十行あまりあると史劇は記述している。

たとえば引地正俊は「郭沫若はシェークスピアをよく読んでいたにちがいない」と書いている（郭沫若選集 7 史劇Ⅱ読者のしおり）。郭沫若の在日時、すでに我が国では坪内逍遙のシェークスピア研究が知られていたが、かれが日本時代にどのようにシェークスピアに触れていたかは、不明ながらわたしに知識がない。しかし、引地の推察のように、郭沫若がシェークスピアに親しんでいたとすれば、「屈原」とシェークスピア作品とを比較し、その相関関係を論じることはあながち無意味ではないだろう。史劇は明確に「リア王」と「屈原」における相似を指摘した。わたしも諸賢にならい、「屈原」とシェークスピア作品を比較してみたい。

「屈原」ならびに「ハムレット」の逆箱おこしと構成分析表の検証

多くの脚本家は劇を書き下ろすさいに、事前に箱書きをつくる。逆に、すでに完成している複雑な物語を、単純化したプロットに

還元して、箱書きをあたらしく再現する場合がある。これが逆箱おこしだ。今回、まず「屈原」ならびにシェークスピア作品の逆箱をおこすことにした。

シェークスピア作品は「ハムレット」を取り上げた。「リア王」の壮大な悲劇より、華麗な謀略のなかで悶々と悩むハムレットのほうが、楚国の忠臣屈原との対比にふさわしいと判断したからである。「ハムレット」の結末では、ハムレットにしこまれた毒酒を、あやまってガートルード王妃が飲み絶命する。いっぽう、「屈原」の結末では、屈原にしこまれた毒酒を嬋娟（せんけん）があやまって飲み、体を痙攣させながら死ぬという設定で、嬋娟の死はまるでガートルード王妃の死の引き写しのようである。

今回使用するテキストは、「ハムレット」のダイジェスト版として定評のある〈Lois Burdett [Hamlet For Kids] 鈴木扶佐子訳 [Art Days]〉。「屈原」は〈郭沫若選集 6 史劇Ⅰ「屈原」須田禎一・杉本達夫訳〉を底本とした。

完成した逆箱は「ハムレット」がＡ４判用紙横書き14枚、「屈原」でも10枚におよぶ。本稿で全容の提示は無理であるから、ちなみに「屈原」の逆箱は冒頭から五分の一を例示した（資料①～屈原逆箱）。表中の左列は底本のページ数を表している。逆箱の完成後、それをもとに次は構成分析表を作成した。縦軸に時系列を、横軸に登場人物を配し、人物の葛藤が時間の推移によってどのようにドラマとして展開しているかを一覧表にした。本稿においては輻輳をさけるため、構成分析表は「ハムレット」の例のみを示す。全容二十五頁のうち、冒頭の一頁を提示した（資料②～「ハムレット」構成分析表）。

表中のグレーのセルは、原表では情感カラーでわけられている。「喜び」→ピンク、「悲しみ」→青、「怒り」→赤、「不安・疑惑」→グレー、「計略・決意」→緑、「和解」→黄色で表した。さらに、「喜び」、「悲しみ」、「怒り」はそれぞれ劇的感動値を２ポイント、「不安・疑惑」、「計略・決定」、「和解」の劇的感動値を１ポイントでカウントすることにした。この表で見ると、たとえばシーンごとの劇的感動値は表の最右列に表記している。この表でシーン１（６ページ）からシーン５（10ページ）まで、各シーンの感動値はそれぞれ１ポイント。シーン６（12ページ）は４にカウントされていることがわかる。

そしてこの劇的感動値を時系列に並べて比較してみると、「屈原」と「ハムレット」のドラマトゥルギーの相似点や相違点がわかった。（「劇的感動値」という用語に関しては後述する）

ストーリーにおける劇的感動値の配分表の作成

構成分析表においてシーンを上から順に時系列にならべ、シーンごとの劇的感動値をまとめていくと、劇の進行の中で感動の力点がどのように配分されているのかが分かる。これを二次元座標においてグラフで展開すると、劇の盛り上がりが視覚的に理解できる。

つづいて、Ｘ軸に時間の流れ、Ｙ軸に劇的感動値をプロットし、劇のなかで盛り上がりがどのように配分されているかを、「屈原」や「ハムレット」において確認することにした。

「屈原」における劇的感動値グラフの特性は次の通りである。

① 導入部の劇的感動値が少ない。（「橘の歌」の朗誦シーンが退屈である）

② 劇なかばちかくにいたってようやく、鄭袖の奸計で屈原が陥れられる第一のやま場となるが、その出足が遅い。また、登場人物に緊張感のない動きが目立ち、感動に直結しない部分がある。

「ハムレット」の劇的感動値グラフ特性は次の通り。

① 導入部（１～５）の劇的感動値が「屈原」より大きい。（見張り番所に登場する王の幽霊が導入部の興味あるシーンづくりに寄与した）

屈原逆箱	幕/場	場所	登場人物	内　　容	情感	メモ
135（頁）	1幕	橘園（屈原家の後園）	婵娟（十六歳・下女） 屈原（四十歳前後）	舞台は晩春の夜明けの橘園（屈原家の後園）。 婵娟（十六歳）琴を抱いて左手の内園門から登場。涼亭にのぼり、卓子に琴をおき、よく整頓してから、もとの道を退場。 屈原（四十歳前後）白色のふだん着をきて巾幘（きんさく一ずきん）をかぶり、左手の内園門から登場。左手に帛書一巻を持ち、橘林の中を逍遙する。無意識裡に、実の一つを積んで、右手の掌上でもてあそぶ。しばらくして実を階段の上におき、帛書をひらく。おもむろに声を上げて朗誦する。		
136		〃	屈原	帛書の朗詠「あめつちにいのちを享けて／よき国によき樹たちばな・・・		
138		〃	宋玉（屈原の門弟）登場	宋玉「先生、ほんとにこれは私のために書いて下さったのでございますか。」 屈原「そうだ、君のために書いたのだ。（以下対語中にたえず琴をつまびきする）」		宋玉紹介
143		〃	婵娟登場、退場	婵娟、水瓶をかかえて登場。涼亭の下で水を草に注ぎ、それを屈原に捧げる。退場	わざとらしい伏線	婵娟紹介シーン
152		〃	子蘭（南后の子、足が悪い）登場	子蘭、母（南后鄭袖からの伝言を屈原に伝える→屈原退場	不安、疑惑	子蘭びっこ
156		〃	子蘭、婵娟を追い回す	子蘭は婵娟に気がある	（緑）計略・計画	
158		〃	屈原再登場	屈原、婵娟を戒める「子蘭をいじめてはいけません」		
160	2幕	楚の王宮内廷	南后鄭袖（楚の懐王の寵姫） 女官数人			
161		〃	靳尚（楚の佞臣）登場、南后鄭袖と謀議	靳尚　段取りはつけております。私たちはこのおひるの時刻に勝利を闘いとらねばなりません。私は張儀と相談してまいりました。この短い時間のうちに屈原に対する陛下のご信頼をぶちこわそうということに意見が一致したのです。	計略・計画	
181		〃	子蘭と屈原登場	子蘭「お母さま。屈原を連れて参りました」 南后に呼ばれた屈原が現れた。やがて九歌の舞が始まる。 南后、仮病で屈原の胸に倒れ込む。 楚、懐王が張儀らとともに現れ、屈原と南后のシーンを誤解する。	計略・計画	
188		〃	楚懐王と張儀	屈原逆箱(会報用）拡大カラー	怒り	
191	3幕	1幕と同じ橘園	宋玉・子蘭	宋玉、園内を掃除しながら詩を憶えている。 子蘭登場し、宋玉と雑談。		
197		〃	憤怒の屈原登場	屈　原「（憤怒）近づいちゃいかん、爆発するぞ。私は心に恥ずべきところはない、死をみること帰するがごとしだ。いずれが正か、いずれが邪か、おのずから後世の判断があるであろう。おんみが陥れたのは私ではない、わが楚の国なのだ、わが中華全土なのだ」→憤然と退場→屈原の憤怒をいぶかるみんな。	怒り	
203		〃	靳尚（楚の佞臣）登場、みんなに語る	靳　尚「われわれが陛下のお供をして王宮にもどったとき、ちょうど「礼魂」の舞踊が終わったところだった。私たちはこの眼で見た、三閭大夫が明堂内室の堂上でしっかりと南后さまを抱きしめ、今にも接吻しようとしているのを」	計略・計画	
204		〃	子蘭、子椒、靳尚、宋玉	※屈原について雑言三昧。	計略・計画	
情感カラー	（ピンク）→喜び、（青）→悲しみ、（赤）→怒り、（グレー）→不安・疑惑、（緑）→計略・決意、（黄色）→和解を表している					

資料①～屈原逆箱

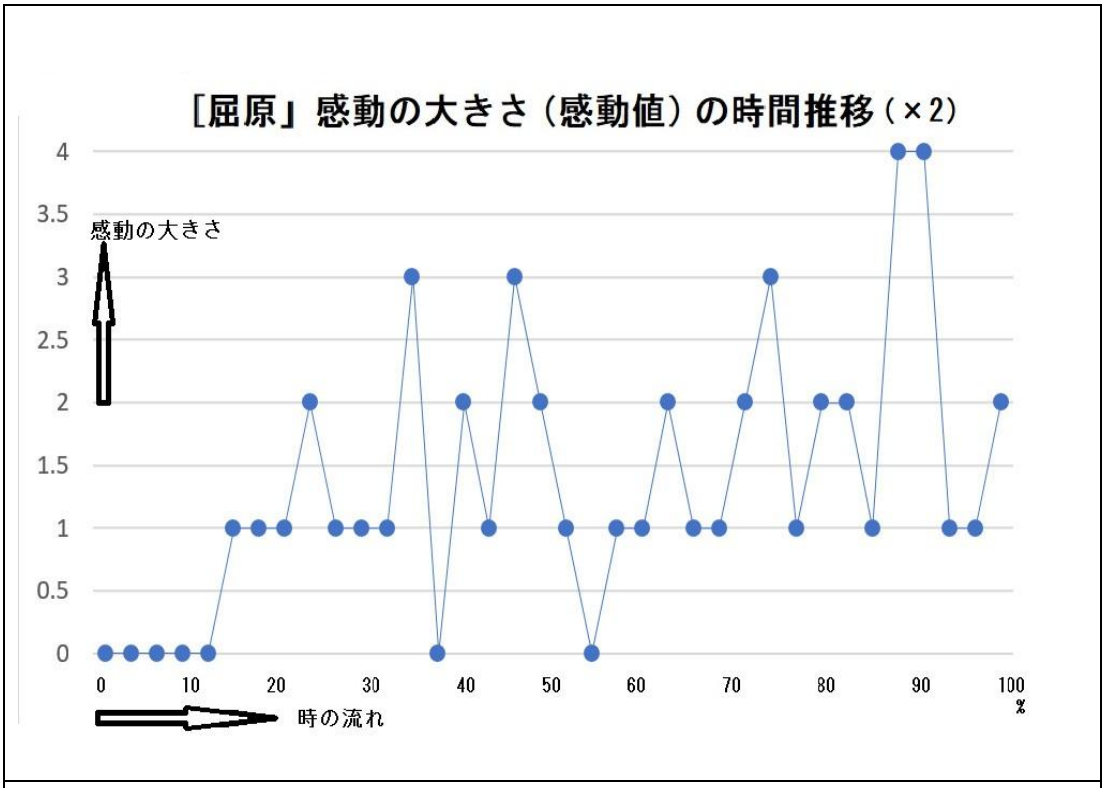
ハムレットの構成分析表

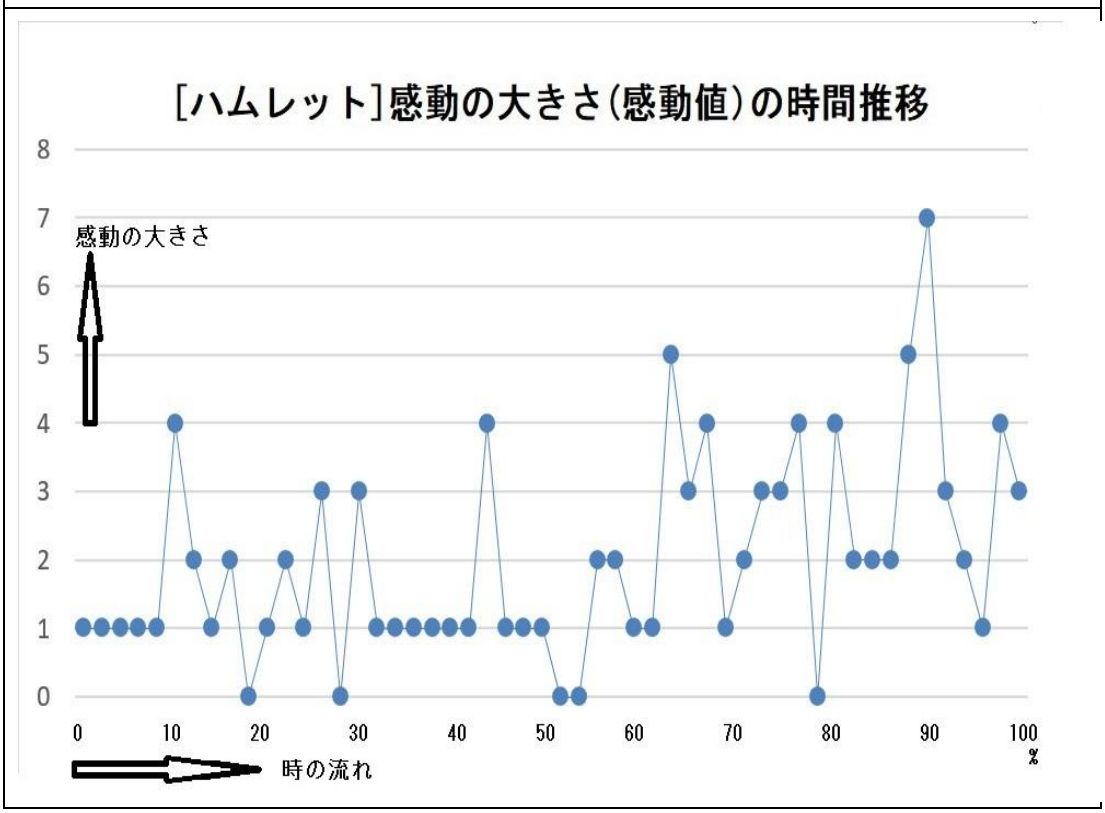
作成・日本放送作家協会九州支部ドラマ部会

＜底本＞Lois Burdett [Hamlet For Kids] 鈴木扶佐子訳 [Art Days]

シーン	頁	情 景	1、ハムレット	2、ｶﾞｰﾄﾙｰﾄﾞ	3、ｸﾛｰﾃﾞｨｱｽ	4、ﾎﾟﾛｰﾆｱｽ	5、ｵﾌｨｰﾘｱ	6、ﾚｱﾃｨｰｽﾞ	感動値
1	6	城壁と亡霊							1
2	7	〃							1
3	8	〃							1
4	9	〃							1
5	10								1
	11								
6	12	ｸﾛｰﾃﾞｨｱｽとの出会い ﾊﾑﾚｯﾄとの出会い	ｸﾛｰﾃﾞｨｱｽ新国王が自分に取り入ろうとすることにうんざりしている。	ｶﾞｰﾄﾙｰﾄﾞ「死んだ人を追い求めるのはやめなさい」	ｸﾛｰﾃﾞｨｱｽ中心の祝宴が行われる。ｸﾛｰﾃﾞｨｱｽ「さ、妃よ、向こうへ行こう」				4
7	14	ﾊﾑﾚｯﾄ独白	父が死んで一か月もたたないのに母が再婚したため叔父が新国王になってしまった。いっそ自分も死んでいたら良かった。	←＜アンダーラインは独白＞					2
8	16	学友ﾎﾚｰｼｵ・ﾊﾞｰﾅｰﾄﾞ・ﾏｰｾﾗｽが来る	昨晩見張りの最中に父王の亡霊を見たとの報告を受け、今夜自分の目で亡霊を見に行くことを決意。			ポローニャス「わが息子よ、フランスに旅立つ前に注意事項がある」・・・と、中を与える（自分の考えをむやみに口にするな、服装は上等に、しかし派手すぎないように・・・、金の貸し借りをしないよう、自分自身に嘘をつかないように」		フランスへ旅立つ前に父親より注意を受ける	1
9	17	ポローニアスがレアティーズとオフィーリアへ忠告する。					フランスへ旅立つ兄レアティーズと別れの挨拶をするオフィーリア。父ポローニアスよりハムレットはオフィーリアを弄んでいるだけだから今後一切つきあってはいけないと忠告される。		2
10	17B					ポローニャス・仏に旅を・・・ レアティーズに意見を言う フランスへ出発前、レアティーズやみんな			
11	18	ポローニャス、娘に意見する				ポローニャス「ハムレットのくどきに乗せられるな。今後、一切付き合ってはならぬ」娘「おっしゃるとおりにいたします」			1
12	20	学友と共に見張り台に立つ	新国王のお祭り騒ぎが聞こえてきて腹立たしい。父王の亡霊が現れ、ﾊﾑﾚｯﾄに手まねきをする。友人の制止を振り切ってついてゆく。						2
情感カラー		（ピンク）→喜び 、（青）→悲しみ 、（赤）→怒り、（グレー）→不安・疑惑、（緑）→計略・決意、（黄色）→和解 を表している							

資料②～「ハムレット」構成分析表


［屈原」感動の大きさ（感動値）の時間推移（×2）
感動の大きさ
時の流れ
4
3.5
3
2.5
2
1.5
1
0.5
0
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100
%


［ハムレット］感動の大きさ（感動値）の時間推移
感動の大きさ
時の流れ
8
7
6
5
4
3
2
1
0
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100
%

② 王の死、悲しみのハムレットなど、悲痛から始まった劇はいったん平穏を取り戻すが、後半に盛り上がり、やがてクライマックスにいたる。劇の流れとして無理が少ない。

なお「劇的感動値」という概念は、岸田国士が自著の「近代劇論」にいたる。劇の流れとして無理が少ない。言葉をもとに、グラフ作成の便宜をはかって筆者が考案した。

終わりに

今回、「屈原」ならびに「ハムレット」の脚本を比較検証してわかったことは、両作とも時間的な盛り上がり配分が巧みで、現在の作劇法からみてもすぐれた作品だということである。「ハムレット」が傑作であることは当然のこととして、「屈原」にも、劇の文脈に良質のドラマトゥルギーが内包されていることを確認した。「屈原」の山脈のかたちは、「ハムレット」のそれと似ている部分が多い。それは盗作とはいえまい。作劇法の追求がたどりついた当然の着地点だったと推察できる。「芸術は模倣から始まる」という言葉を連想したい。「屈原」は多少の欠陥を有しながらも美しい大作だ。

欠陥の由来について次の点を指摘しておきたい。

「屈原」は１９４２年1月、郭沫若がわずか十日間で書き上げた作品であるという。かりにかれの脳裏で、事前に作劇の長い発酵期間があったとしても、あまりにも短い執筆時間だった。のちに修正が行われたとしても、長い間、多くの人が台本推敲にかかわった「ハムレット」にくらべると、磨きぬかれたという仕上げ感が乏しいのはやむをえまい。性急に展開を急ぐ構成が劇の流れに粗雑感を与えている。人物の登退場に作者のご都合主義がうかがえる。

傍論であるが、同時代の日本演劇界について少々。

１９４０年（紀元二千六百年）、わが国に情報局が発足。文芸、芸能界への圧力が強化された。１９４２年、大日本映画製作が設立され、菊地寛が社長となった。かれはやがて文芸銃後運動をとおして翼賛芸術文化を推進する。のちに菊池寛賞を受賞することになる菊田一夫は、このころ劇作家としてスタートし、「麦と兵隊」などで知られる火野葦平の原作「下駄と兵隊」を戯曲化。古川ロッパなどが有楽座で演じ、あたりをとった。

内容は西湖ほとりの村における日本陸軍小隊の駐屯物語で、日中対立の激烈な構図を描くのではなく、劇中に日本兵と中国娘のほのかな恋物語をはさめるなど、微温的な大衆演劇であった。同じころ、中国の奥地重慶で「屈原」が上演され喝采を浴びていたことを思うと、日中演劇の温度差に若干の感慨を禁じざるを得ない。

本論に戻ろう。「屈原」二つ目の論点である。

昨今の作劇法ではよく「起承転結」理論がいわれる。ドラマを「起」で激しく立ち上げる。この手法を脚本家のわれわれは張り手型と呼んでいる。つづいて「承」でドラマの設定やねらいを説き、「転」でクライマックスに突入。「結」で歓喜や悲嘆、もしくはどんでん返しの結末で劇をおわる。ハリウッド型の作劇法はおおむねこれに符合する。第一幕を「まったくもってしらけている」と書いた史劍は、導入部に張り手型を採用しなかった郭沫若への批判であったに違いない。

本来の起承転結はご存じのように絶句の構成法で、起承二句は平直に始めておだやかに受け、第三句でくるりと変化して工夫をめぐらし、第四句は流れを下る舟のように収束せよという。この構成は、能でいう序破急に似て、静から動へ、緩から急への構成理論である。「起句は平直に」という構成法の呪縛が、郭沫若に張り手型の導入を拒否させたのだろうか。それとも詩劇や舞劇創造へのにらみをきかせて、「橘の歌」の長い伏線シーンになったのだろうか。

その謎解きは、わたしにとってこれからの課題である。

『女神』の再認識（下）

魏　建著／岩佐昌暲訳

目　次

はじめに
覆い隠され捻じ曲げられた『女神』
一　「小我」と「大我」
二　『女神』は結局中国詩にどういう貢献を行なったのか？
三　『女神』は結局中国詩にどういう貢献を行なったのか？
（本号）

三　『女神』は結局中国詩にどういう貢献を行なったのか？

『女神』の最初の詩が書かれたのはもう百年前のことである。この一世紀以来、なぜかは知らないが、研究者はつねに『女神』に詩以外のものを探し求めてきた。例えば、今でもまだ多くの学者が『女神』には五四啓蒙運動の思想的な力がどれだけふくまれているかに焦点を当てている。だが、郭沫若がこの詩集の中で喚起しているのは、主に理性的な思考ではなく、感情の衝撃であり、旺盛な感覚の力とゆたかな想像力であり、新たな詩美の規範なのである。『女神』の倫理原則や美学原則と同時に誕生したものには、ほかにまた郭沫若が発見し創造した、現代中国人の思想感情に適応し、新詩の表現にかなう新たな芸術上の規律――〈内在律〉がある。詩歌の本体から言えば、中国詩にたいする『女神』の最大の貢献は、〈内在律〉の発見と創造によって一時代の詩風を開拓したことである。

中国の古典詩は中華民族の誇りである。長期にわたる芸術の実践の中で、中国の古代詩人は一つの精緻な形式の体系を作り上げ、それを遵守してきた。この体系は東洋の古典的生活情調、生活様式、美的理想が生み出したものである。国家の門を世界に開かざるをえなくなったとき、〈アジア的生産様式〉と〈調和〉を美とする文芸の理想もこれに従って変わらざるをえなくなった。詩についていうならば、中国旧詩〔文言定型詩〕【注1】の〈外在律〉（平仄、対、押韻、句法などの規則を重視し、声調を核心とする格律の体系）は、すでに現代中国人の情緒の自由な発露に適応するすべを失っていた。初期の白話詩人は、白話を詩にもちこみ、かつ〈詩体の大解放〉に力を傾注するという初歩的な試みを実現してはいたが、しかし、旧詩の〈外在律〉の体系に根本的にとってかわる新詩〔現代詩〕の詩美の理想と芸術的規則を見つけ出していたわけではなかった。

郭沫若は現代人の思想感情表現に適した新詩の芸術法則――〈内在律〉を発見し、創造したが、ではそれはどういうものか？彼はこう述べる。「詩の精神はその内在の韻律（Intrinsuc Rhythm）にある。内在の韻律（あるいは無形律ともいう）は平上去入〔声調〕だとか、高下の抑揚、強弱長短、宮商徴羽〔音律〕といったものではない。また双声畳韻などでもなく、文中に韻をふんだ韻文でもない。これらはいずれも外在の韻律あるいは有形律（Extraneous Rhythm）である。内在の韻律はすなわち「感情の自然な増減」【注2】なのである。郭沫若が初期の白話詩人よりも優れている点はここ

注1（訳注）文中、〔　〕内の説明は訳注、（　）は原文のままである。
注2（原注）郭沫若「論詩三札」『郭沫若全集・文学編』第15巻、人民文学出版社、一九九〇年、第三三七頁。
なお、この箇所の原文は「情緒的自然消漲」。「論詩三札」原文には「感情」という語も使われているが、本訳稿では「情緒」をすべて「感情」と訳した。それでいいかどうか、自信はない。諸賢のご教示を請う。

にある。彼が最初から注意をはらっていたのは、白話が詩に持ち込めるかどうかではなく、旧詩の芸術規範に取って代わる「詩の精神」を新詩のために見つけ出すことだったのである。

〈内在律〉に従って創作された『女神』は、意象、想像、リズムなど詩体の面で、後世の中国新詩の見事な手本を打ち立てた。

〈内在律〉は感情表現を核心とするものなので、現代人の内にある自由で開かれた感情は、それに合致し、それを託す外在的な表現形式が必要である。中国古典詩歌によく見かける意象〔イメージ〕、たとえば「杏花」「春雨」「晨鐘」「暮鼓」「暁月」「清風」といったものは、どれも郭沫若の現代的詩心を伝え難かった。『女神』でこれに取って代わったのは、ある巨大な意象――「太陽」「地球」「無限にひろがる太平洋」「雪のヒマラヤ」……などだった。これらの意象は詩のなかでは、強大な生命力の象徴であったり、宇宙のエネルギーの象徴であったりする、郭沫若の厖大な詩心の理想を寄託する表現形式なのである。それらの言葉に郭沫若は、当時、時代に欠乏していた青春の生命の熱情を注ぎ込み、また中国の変革に必要な「動」と「力」の源泉がそこにあることを伝えようとしたのだ。

郭沫若は激情に満ち溢れ、また感情表現に巧みだった。彼は「純粋な感情は詩にはなら」ず、実際の感情を詩の感情に高めるには、想像力の関与が不可欠だということをよく知っていた。彼の「天狗」（天の犬）は想像芸術の傑出した見本である。作品が表現しているのは自我を拡げよう、旧世界を破壊しようという思想感情である。だが詩は理屈を述べない。豊富な理性的含意が、独特で不思議な想像を通じて作り出された意想のなかに隠されている。詩の冒頭、非現実的な感覚によって実在のワタシを幻想のオレに入り込ませる――「オレは天の犬だ！……オレは全宇宙を飲み込んだ……オレは全宇宙の Energy の総量だ！……オレのオレは爆発しそうだ！」この一連の想像活動の中で、自我の発揮はその極点まで達していると言ってよく、青春の熱情の輝きは比類なく、すべての古い事物は跡形もなく消え去っている。　正にこの神奇な想像の力が、『女神』によって新詩の芸術的品位を高めさせ、かつ現代人の感情〔原文は「情緒」。〕の自由な発露のために飛翔の羽根を生えさせたのである。

郭沫若の〈内在律〉体系のなかのもう一つの重要な要素はリズムである。彼から見れば、感情は詩の最も核心的な内容であり、リズムは感情を伝達する最も主要な形式である。郭沫若はさらにこう言う。「リズムは詩においてはその外形であり、その生命でもある」。中国古典詩歌が字句を練ることを重んずるのに反し、『女神』の各詩行がそれぞれ独自に備えている美的意義は大変小さい。たとえ『女神』の最も優れた詩の中の一，二行を取り出したとしても、スローガンのような詩的味わいの乏しさを感じるだろう。だが、ほかならぬこうした「詩的味わいに乏しい」詩句が、郭沫若によって組み合わせられると、大いに新詩特有の輝きを放つのである。その奥義の一つは、リズムの力である。『女神』の代表作「鳳凰涅槃」は「感情の自然な増減」で全詩を組み立てており、一曲の感動的なリズムの楽章を形成している。序曲の沈鬱、鳳の歌の憤懣、凰の歌の哀婉から、鳳凰同生の歌の沸騰激高に至るまで、「弱―強―弱―特強」のリズムが起伏し、旧世界に対する呪詛、新生への渇望と新生の後の喜び、段階を追って思う存分表現されている。詩のリズムは新詩特有の広大な勢いを形成している。それは、詩人の燃えるように熱い、奔放な青春の情熱の外化であり、読者にその中から生命の力、自由の力、止めることのできない青春の力を感じさせる。

自由体の新詩は、郭沫若が始めて作ったのではなく、彼の手中で成熟した。『女神』中の多くの名編は自由体の詩である。『女神』中の自由体の詩は前人を越えた。郭沫若はこの解放された詩体を自由だが制約のあるものにした。彼の自由体の詩は〈外在律〉の束縛は受けないが、〈内在律〉の支配はうけるのだ。理性の規範には縛られないは、感情表現の支配はうける。『女神』中の多くの非自由体の詩もこの法則に従っている。『女神』の詩体は「感情の自然な増減」に

基づいて詩歌形式を設計した〈女神体〉である。〈女神体〉の自由は主要には詩の外形上の自由ではなく、創作の主体が〈内在律〉の必要に基づき、自主的に詩作の外形を支配する自由である。『女神』中の各編の行数は同じではない。各行の長短も異なる。だがどの詩にも「感情の自然な増減」がある。「天狗」の中で連続して現れる「我飛跑（オレは飛ぶように走る）」は、毎行三文字、飛ぶように走る詩行によって、自我超越を急ぐ切迫した気持ちを伝えている。「地球の傍らに立って叫ぶ」の中では、郭沫若は逆に長い句を使って別の切迫した気持ちを伝えることができている。たとえば、

無数の白雲がいま空中に湧き起こっている
ああ！なんと壮麗な北氷洋の晴れ景色よ！
限りなく広がる太平洋はその全身の力を持ち上げ地球を押し倒そうとしている。
ああ！ぼくの目の前に逆巻く大波が押し寄せる！
ああ！絶え間ない破壊、絶え間ない創造、絶え間ない努力よ！
ああ！力よ、力よ！
力の絵画、力の舞踊、力の音楽、力の詩、力の音階よ！

全詩の「感情の自然な増減」と津波の波濤が逆巻くリズムとはぴったり符号している。詩人はこのような生命の激情を〈動〉と〈力〉の叫びに凝集させ、一人の目覚めた人間が「絶えまなく破壊」し、「絶え間なく創造」し、「絶え間なく努力」している勇壮な姿に凝集させている。詩中のあの空に湧き起こる白雲、逆巻く波濤、無限に広がる太平洋、押し倒されそうな地球、どのひとつも詩人の生命力の激しい湧出や激情のほとばしりを伝える格好のイメージとなっている。そこで、詩句の形式の配列はすべて人と自然が形成した〈音階〉に従っている。〈動〉と〈力〉を叫ぶ切迫した心情を表現するときには、一気に口に出す必要があり、だから詩行は長くなる。「限りなく広がる太平洋はその全身の力を持ち上げ地球を押し倒そうとしている」は一行がなんと漢語二十一字にもなり、しかもわざと句読点を付けていない。賛美や詠嘆の際には、停頓が増える。だから詩行は短くなり、助詞が増え、さらに感嘆符を加えている（当時の詩で感嘆符を使う者はほとんどいなかった）。たとえば、「ああ！力よ、力よ！」は、一行には意味をもつ語〔原文は「音節」〕はただ一つ――「力」しかなく、それ以外はみな感情を表現する補助的な道具である。だから〈女神体〉の自由は放任の自由ではなく、新詩の感情表現の手段を拡大するためには、どう行分けし、停頓の回数、各行の字数　句読点や各種の記号をつけるかどうか、それをどう使うかが、いずれも特殊な感情表現の役割をはたすことを計算したものである。まさに郭沫若のこういう自由であってしかも〈体〉のある詩形が、一世紀近い中国新詩の形体の主流を牽引したのである。

郭沫若は新しいものを唱導し、実践した。しかし古いものを大量に運用することも排除しなかった。

中国新詩に対する『女神』の意義については、これまでの文学史の記述には多くの疎漏がある。詩体について言えば、前人は『女神』が自由体詩を始めたということを特に強調し、中国新詩の詩体に対するかれの多方面に渡る探索を軽視しているのだが、新格律詩に対する郭沫若の試みはとりわけ見落とすべきではない。郭沫若は自分は新詩を書くにに形式を最も厭い、自然の流露を上乗とすると言っている。後人は郭沫若の特定のコンテキストにおける言葉を、『女神』時期の詩的追求のすべてだとみなしているため、絶対多数の文学史の著作は、『女神』中の「天狗」や「鳳凰涅槃」などの作品を例に、郭沫若がいかに徹底的に中国詩の格律の枠を突破し、新詩の形式上の「絶対的自由、絶対的自主」を追求したかを説明している。このような文学史の叙述は読者に一面的な印象――『女神』の詩篇はほとんど「天狗」や「鳳凰涅槃」のような自由奔放な自由体であるかのような印象を与える。

だが、実は『女神』の詩体は多様なものであり、だいたい四つに分類できる。一は自由体、すなわち詩行と節の字数が固定せず、基本的に韻をふまず、対称でない自由体である。この種類は『女神』では数が多くない。二は半自由体で、部分的に韻をふみ、音歩、行分け、形体などの法則を重視する。この類は『女神』では比較的数が多い。三は歌劇体で、例えば「鳳凰涅槃」「棠棣之花」「湘累」などである。この類は『女神』では比較的少ない。四は新格律体で、『女神』では少数ではない。たとえば「沙上的脚印」「新陽関三畳」「Venus」「三個汎神論者」「別離」「新月与晴海」などである。これらの作品はいずれもきちんとした現代中国語で書かれた新詩である。ただ外在形式が整っていて、どの節の行数も完全に同じ、各節の始めと終わりの詩句の語と字数も基本的に同じ、全詩の韻脚は一致、文形式も対称か基本的に対称、リズム感のあるのが明らかである。このほか、「炉中煤」と「匪徒頌」などの名作もみな自由体詩であるが、聞一多の「死水」のような、新格律詩である。以上に挙げた郭沫若の詩作の数々はひとしく一九一九年から二十年初めに発表されていて、朱自清が『中国新文学大系・詩集・導言』で認定した新格律詩の創始作――陸志韋の「渡河」より三年余り早いのである。

郭沫若の詩体の多方面にわたる探求は、彼の〈内在律〉の詩歌理論のたえざる実践でもあった。内なる感情が異なるから、一首の詩にはそれにふさわしい詩の形式が必要であり、いかなる外在形式で縛ることもすべきではない。この時期に郭沫若が試みたあらゆる詩歌体式は、彼の開放的な多面的探索の体現――中国詩の未来の発展のためにさまざまな可能性を探ったものであった。これが、郭沫若の中国詩への貢献のより重要なものである。（完）

郭沫若の作詞したロマン・ロラン追悼歌「平和の光」について

内田　知行

ロマン・ロランは、一九四四年十二月三十日、フランス中部のベズレーで逝去した。この報道は一九四五年一月四日には戦時首都重慶の新聞『新華日報』が報じた。中国では、ロマン・ロランは反ナチズムのレジスタンスを担った文化人として高く評価された【注1】。

一九四五年三月中旬には、中国の政治家・文学者と各国の外交使節とが共催で「ロマン・ロラン追悼会」を挙行することが決まった。三月二十五日、場所は重慶市の青年館と決められた。

参加した外交使節は、重慶に駐在するフランス・英国・米国・ソ連・オーストラリア・カナダ・メキシコ・トルコ・オランダ等の大使館員であった。中国側では、宋慶齢・郭沫若・孫科・于右任・張治中らが関係した。

当日の式次第は、フランスをはじめとする各国代表の発言ののち、演劇人らによるロランの作品『愛と死の戯れ』の数節の朗誦、重慶における文芸界の指導者・郭沫若の作詩、馬思聡の作曲による追悼歌の披露、中華交響楽団によるヴェートーベン『第三交響楽』の演奏などがあった【注2】。中国政府の要人に主要な外国使節団が加わった、国際色の豊かな追悼会だった。

当日は、戯曲家であり映画編集者であった洪深が開会を宣言し、国民政府監察院院長の于右任が追悼演説を行なった。黒衣を着た人びとが舞台上で追悼歌を歌ったのち、郭沫若が中華全国文芸界抗敵協会を代表して追悼演説を行なった【注3】。

当日披露された郭沫若作詩、馬思聡作曲の追悼歌「平和の光」の歌詞は下記の通りである【注4】。メロディは不詳である。

一隻宏大的戦船停泊到了安全的海港、

狂暴的雷雨漸漸地快要鎮定的時候、
有稀微的希望底晨光、破露在那天上、
斜射着波涛還在凶涌着的血底海洋。

多麽長遠的、艱苦的、但可磊落的戦闘呵、
你偉大的法蘭西的児子、真理底領港、
你為法蘭西底再生、人類底再生、和平底再生、
慷慨地、沈着地、輸出了你最後的一珠血漿。

看呵、你的旗幟永遠在搭檐頂上揭揚、
你偉大的人類愛底使徒、你請安息吧、
戦船、就像疾風的駿馬、和你生前一様、
早又奔騰上消滅法西斯野獣的世界戦場。

呵、你聴、馬賽曲底歌声是多麽的嘹亮
人類在慶祝着新的勝利、新的誕生、新的成長。
你偉大的民主戦士、羅蔓・羅蘭、你永生了！
你永遠是法蘭西之光、人類之光、和平之光！

（日本語訳）

一隻の巨大な「戦いの船」が、安全な海港に停泊しました。
狂暴な雷雨がだんだんと静まりかけたとき、
かすかな希望の朝の光が、あの天上で露を破り、
大波がまだ逆巻きをする血だらけの海洋に、差しこんでいます。

どんなに長く、苦難に満ちて、しかしおおらかな戦闘だったか、
あなたはフランスの再生、人類の再生、平和の再生のために、
意気高らかに、沈着に、あなたの最後の血漿の一滴までをも捧げました。

見よ、あなたの旗印はマストの頂きに永遠にひるがえっています。
あなたは偉大な人類愛の使徒よ、どうか安らかに眠ってください。
「戦いの船」は、風にいななく駿馬のように、あなたの生前と同じように、
さらに疾走して、ファシストどもを世界の戦場から消滅するでしょう。

ああ聴いてください、高らかに響き渡る「ラ・マルセィエーズ」の歌声を、
人類はいま、新たな勝利、新たな誕生、新たな成長を祝っています。
あなたは偉大な民主の戦士、ロマン・ロランよ、永遠に生きてください。
あなたは永遠にフランスの光であり、人類の光であり、平和の光です。

注

【1】黄俊英〔一九九一〕『二次大戦的中外文化交流史』重慶出版社、二九三頁。

【2】「各使節和孫夫人等、発起追悼羅蔓羅蘭」『新華日報』四五年三月一七日。

【3】「偉大的民主戦士、記羅蔓羅蘭追悼会」『新華日報』四五年三月二六日。

【4】「和平之光」『新華日報』四五年三月二五日。郭沫若がのちに出版した著書では、第一節四行の構成が変更された。すなわち「有稀微的…」から始まる第一・二行に「一隻宏大的…」から始まる第一・二行は第三・四行に移された。表題にそくして「光」を強調するための修正であった、と思われる。〔一九九七〕『郭沫若選集（第一巻）』人民文学出版社、一九九七年、二五九頁を参照。なお、訳出にあたって、須田禎一訳〔一九七二〕『郭沫若詩集』未来社、一九〇～一九一頁を参照した。

成仿吾の欧州行〔一〕

成家　徹郎

序

一九二五年ころから一九二七年にかけて、成仿吾の頭の中は創造社と文学論のことで一杯であった。ところが一九二八年五月に急に欧州へ行くことになった。この時期が、成仿吾の人生において最大の転機になった。これ以後、成氏は文学論を論じることがないばかりか、そもそも文学論を熱心に論じていた人がなぜ急に欧州へ行くことになったのか、そして欧州で実際に何をしていたのか、こういう点について成氏は、後年、回憶録のかたちでも書くことはなかった。文学論や文学活動を放棄するとは、すなわち創造社と絶縁することであった。欧州での活動は彼にとって新しい特別の経験であったはずだ。このことについて何も書かないのは、書きたくないからなのか、あるいは書いてはならないことだったのか。突如欧州へ行くことになった事情や、欧州における活動などについて考察する。直接的証拠はほとんどないので、情況証拠によって推測するしかない。成仿吾の欧州行は、当時の中国の非常に特殊な事情（以後一九四五年までの状況を考えても特殊であった）と密接に関わっていた。そこでまず社会状況を振り返ってみる。またこの時期における〝革命〟の意味についても、当時の人（民衆）の間でどう認識されていたのかよく考える必要がある。そうでないと成仿吾そして魯迅が言うところの〝革命〟について誤解する恐れがある。

（一）一九二七年の「革命」と中国共産党指導者

一九二七年二八年の革命は、中国共産党にとって、方針上の誤りがあったことは明白である。今では中国共産党も認めている。（たとえば金冲及主編『周恩来伝』など）

▼資料　欧州行前後の、成仿吾、周恩来、郭沫若、三氏の行動（成仿吾は、欧州へ行く直前まで文学論と文学活動に精力を注いでいる）

成仿吾	周恩来	郭沫若
一九二七年 七月　広州から上海に来る。 （武漢政府、共産党と決別） 八月一日、南昌蜂起 十月、日本へ行く（演劇運動をとなえる）中井著１９３頁 十二月、上海に帰る 十二月、広東コンミューン	**一九二七年** 十一月　香港から上海に来る。 中共中央の緊急会議	**一九二七年** 十二月　広東から上海に来る。
一九二八年 （一月～三月の頃、周恩来の要請または指示を受けて欧州行を決断する。） 五月　シベリア経由で欧州に行くことになり上海を離れる。まず日本市川市に行って郭氏と会う。	**一九二八年** 一月　中共組織局主任になる 三月、香港広東へ行く 四月、上海にもどる 六月、中共六全大会がモスクワで開かれる。周夫妻モクワへ行く。	**一九二八年** 二月一日　郭氏訳『フアウスト』出版 出版祝いに成氏も加わる 二月十日　周恩来が、郭氏の日本亡命を勧める。 二月一六日、送別会成氏も参加。 二月二四日、乗船、来日

周恩来は当時、共産党指導者層の主要な成員であった。そして成仿吾は彼の指令を受けて欧州に行くことになった。この時期の「革命」状況はそうとう複雑だった。この「革命」をよく認識しなくては、共産党の「革命」が農民大衆からどう見られていたか、見誤る恐れがある。

当時の革命の基本的状況は、次の資料に表われている。

コミンテルン執行委員会第八回拡大プレナム（全体会議）、「中国問題に関する決議」一九二七年五月。

この「決議」に対して「資料集」編者はこう説明している。

一九二七年五月一八日から三〇日にかけて、コミンテルン執行委員会第八回プレナムがモスクワで開かれた。議題は四つあったが、その一つが「中国革命の諸問題」であり、四・一二クーデター以後の中国革命の新しい情勢とコミンテルンの政策についての討議が行われた。まずブハーリンが報告を行い、それをめぐって討論が展開された。その結果採択されたのが、本決議である。これは第七回プレナムのテーゼ(第二巻資料７４)を基本的に正しかったとみなし、新しい段階において中国共産党が武漢政府に積極的に参加する必要を主張し、反対派のソヴェト樹立論を強く批判している。この討論には、反対派からトロツキー、ヴヨヴィッチが加わり、スターリン、ブハーリンらの路線を批判した。

（日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』第三巻、資料１９．）

以下、この時期の「革命」の状況について主に野村浩一『人民中国の誕生』、ハロルド・R・アイザックス『中国革命の悲劇』下巻に基づいて述べる。

一九二七年四月一二日、蒋介石による中国共産党に対する弾圧が始まった。この後、中共はいかなる行動をしめしたのであろうか？

こうした蒋介石主導下の北伐およびその変質過程に対して、共産党は、どのような態度をもって臨んでいたのか。ここには、当時のコミンテルンと中国共産党、ないしはスターリンとトロツキーといった、さまざまなレベルでの当事者間の、複雑きわまりない確執がひそんでいたのである。

コミンテルン＝スターリンの誤算

広州から武漢への革命の展開のなかで、ボロディンは、国民党顧問として、枢要な地位を占めていた。そして、コミンテルンは、ボロディンその他を通じて、共産党ないしは武漢国民政府に対して、ほとんど時々刻々の指令を発していた。このとき、コミンテルンのリーダーの一人は、レーニン亡きあとを受けたスターリンであり、そして中国共産党の指導者は、党総書記陳独秀だった。

ところで、北伐に対するコミンテルンの指導は、一言でいえば、ほぼ一貫して「国共合作を堅持せよ」ということにつきていた。たしかに北伐は、いわば国共の統一戦線を形成することによって破竹の勢いで進展することに成功した。それは、全体としてみれば、反軍閥戦争の最も有効な武器であった。だが、蒋介石の反共が明らかになってくるとやっかいな問題に直面した。二つの路線のうちどちらを取るべきかという問題に直面した。

「国共合作という大前提のもとに、蒋介石のそういう立場をひとまず黙認し、かつこれと妥協するか。」あるいは、

「野火のように拡がる労働者・農民運動を基盤に、中国共産党独自の路線追求を準備するか。」

コミンテルンの選んだ道、そして陳独秀がそれを受けつつ遂行していった道は、ほとんど最後まで、前者、すなわち蒋介石との妥協を求める道だった。

スターリンは、中国共産党の活動を制限し、蒋介石を「怒らせない」ことによって、合作を堅持する道をたどっていた。コミンテルンの指令を忠実に遂行していた陳独秀の党中央もまた、ひたすら妥

協の道を模索していた。そして三月の末、反革命クーデターの準備が明らかになりつつあったとき、コミンテルン執行委員会は、上海の中共党員に対して、次のように指令していたのである。

「この時期において公然たる闘争は始めるべきではない。武器を放棄してはいけない。非常の場合にはかくさなければならない。」

このようにみてくると、クーデターに対して、上海の労働者がなぜあれほど無防備だったのか、また、その翌日、司令部に対してなぜ請願隊がくり出され、多くの虐殺をこうむったのか、さらにまた、長沙での農民武装隊の反撃の試みに対して、党中央は、なぜ中止命令を出したのか、それらの理由はきわめて明瞭となってくるだろう。党中央は、蒋介石の裏切りが明白となったのちも、なお、武漢の容共左派との妥協を求めてさまよっていた。

なぜ国共合作に固執したか

ちなみに、コミンテルンにおいても、蒋介石によるクーデターに警告を発しつづけていたのは、トロツキーだった。かれは、その革命家的直感と情報の分析を通じて、すでに中山艦事件以来、国民党の反動化を予想しつつ、むしろ共産党独自の路線を追求することを要求していた。

そのころソビエトでは、レーニン死後の党の指導権をめぐって、スターリン派とトロツキー派とが激烈な争いをくりかえしていた。中国革命をどのように指導するかという課題について、ソビエト共産党＝コミンテルン内部で、権力闘争とからんで、議論が続いていた。結論的にいうと、少なくともこの時点においては、トロツキー派のほうがより適切な見通しを示していたにもかかわらず、かえってスターリンの指導方針が、一貫して中国への指令を貫通していたのである。その指導の誤りは、こんにちでは、すでに明白な事実である。

スターリン・ソ連の実情はこうであった。当時内外ともに危機的状況にあるソビエト政権にとって、それがどのような相手であれ、およそ帝国主義との戦いを遂行している勢力はすべて味方だったのである。蒋介石は、それを遂行しうる軍事力をもった唯一の人物であるように思われた。共産党がその代役を果たすことができるとは、まったく考えられなかった。そして帝国主義諸国の勢力を中国へとさかせることは、とりもなおさず、包囲の重圧に悩むソビエト政権にとって、きわめて重要な利益だったのである。

この時の状況についてハロルド・R・アイザックスの指摘はもっと厳しい。

モスクワではスターリンはソヴェトのスローガンを拒否していた。理由はこのスローガンが「革命的中心」「唯一の政府的権威」たる武漢にたいする闘争を意味するからだった。トロツキーは「革命的中心」などというのはフィクションである、革命的権力機関はまさにこれからつくるべきもの、それはただ労働者・農民・兵士のソヴェトを通じてのみつくられるのだと反駁した。では湖南・湖北の町や村の実際の状況はどうであったか。武漢にいた湖北省農民協会の代表たちがもっとも緊急な必要は「ただちに行政制度を維持する機関をつくることである。現在存在している政治機関は、実際には政権ではない」と声明していた。

武漢では共産党が国民政府の行動に全責任をとってきた。共産党員は国民政府と各省政府のポストについた。共産党の指導者は国民党の指導者とともに、いわゆる「連席会議」のなかに議席をもっていた。そこではあらゆる重要な政策が決定された。これらの集会における共産党の任務を制定する決議のなかで、共産党中央委員会は五月の初めこう声明している。「この連席会議ではあらゆる主要問題を討論し、具体的な提案をおこなわなければならない。しかしその具体的提案は、わが党の最高要求にもとづくものではなく、国民革命の発展、国民党左翼との団結の利益を考慮にいれておかなければならぬ。」ここで共産党は連合政党の一方の代表者としてではなく、

「ブロック」のなかで働いている、国民党のメンバーとして、その綱領とその規律に従わなければならないことを記憶しておかなければならない。それゆえ、最初の連席会議のひとつで王精衛が「ただ国民党の中央執行委員会だけが連席会議の決議を裁可し、発表する権利をもっている」といったとき、共産党代表はそれに同意した。

武漢指導者と共産党が農民の「ゆきすぎ」に悲鳴をあげ、「秩序の回復」を訴えているあいだに、軍閥はまもなくかれら自身のやりかたで「秩序」を回復しはじめた。「革命的軍隊」は武漢の政治家が内心希望していながら、説得では成功しなかったものを、力で完成するために動きだした。

五月二一日、湖南の首都長沙には、夜のとばりがおりてから数時間後に、ライフル・機関銃が暗闇に炸裂した。午前一時に唐生智の武将で、この地方の守備指令許克祥は、かれの部隊第三五軍第三三大隊に命令をだし、兵士の腕に白い腕章をつけさせた。許が彼らの先頭にたって、湖南省総工会本部にむかって進撃した。門のところで四人のピケット、二人の婦人、もう一人の男が射ち倒された。兵士は建物のなかに乱入した。それからつづいてただちに襲撃隊はわかれわかれになって、省の国民党本部・党学校、多くの労働者・農民・学生の大衆組織が占領している建物をおそった。本部は粉砕され、そこにいたものはその場で射殺されるか、逮捕されるかしてしまった。ほとんど夜明けまで射撃がつづいた。その後しばらくすさまじい虐殺が続いた。

五月二一日の翌朝、各地に散在していた農民・武装部隊を逆襲の目的に動員する企てがあった。彼らの指導者は長沙郊外の丘陵地に武装隊の集結を命じた。農民武装隊やピケットはかれらのライフルをもって指定された場所に集まった。この数日中に妻子・兄弟・父母を失って憎悪にもえたぎった数千名の農民軍は、長沙にむかって進撃しようとしていた。そこは許克祥が一千数百名の部下とともに支えているだけだった。農民たちは彼らを包囲し、全市を占領するつもりで、全省の勢力を組織しようとしていた。彼らがとくに期待していたのは、武漢から派遣される援軍であった。

そのとき武漢の共産党中央委員会から、長沙攻撃の計画を中止し、「国民政府が問題解決のためにとる行動を待て」という命令が到達した。だが彼らはすでに行進中だった。全国総工会・全国農民協会は、五月二七日に合同でつぎの電報を打った。「湘潭湘郷の組合気付、湖南省農民協会および総工会へ、中央政府は五人の委員を任命せり。彼らは本日の朝長沙問題解決のために、すでに当地を出発す。全省の農民労働者同志にこれ以上の摩擦をさけるため忍耐づよく政府委員の到着を待つよう伝えられたし。」

湖南省の共産党中央委員会の代表はただちに全農民組合の退却命令を発した。その命令は瀏陽県の二つの分隊をのぞいて全部に到達した。その二分隊はすでにそのとき長沙の城門に達していた。彼らはそこで許克祥の機関銃になぎ倒された。この延期によって、のちに蔣介石からこの省の管理をゆだねられることになった何鍵は、長沙の守備隊を増援するため岳州から二連隊をそこに送ることができた。

武漢から送られてきた「五人の委員会」は譚平山が委員長だった。瞿秋白は、この一行は五月二六日漢口を出発し、ボロージンも「秩序回復の任務を実行すべく」同行したと記録している。しかしかれらは湖南省境からさきへは行かなかった。かれらは岳州で何鍵軍の部隊によってひきかえさせられた。「秩序」を回復する任務は、すでにもっと能力ある反革命によっておこなわれていたのだ。

五月二四日、すなわち長沙事件の三日後におこなった演説でスターリンは、武漢政府と国民党は中国農業革命の機関であるという理由から、ソヴェトの創設にたいする反対をくりかえした。彼はこう述べた。中国が農業革命を経験しつつあるいじょう、・・・武漢が中国の革命運動の中心であるいじょう、武漢の国民党を支持することは必要である。プロレタリアートとその党の支配権が国民党の内外

において確立されるという条件のもとに、共産党が国民党とその革命政府の一部を構成することは必要である。現在の武漢政府はプロレタリアートと農民の革命的独裁機関であろうか。いやいままではそうではない。また、それほど速やかにそうなるものではない。だがそれは、革命のこれからの発展においてそういう機関に発展するあらゆる機会をもっている。・・・」

〔一九二七年八月一日　南昌蜂起〕
〔一九二七年十二月　広州蜂起・広州コンミューン〕

ソ連では、スターリン派とトロツキー派の間で激しい権力闘争が続いていた。この闘争に勝利するためには、これまでのスターリンの方針が正しかったと証明されなくてはならなかった。そこでコンミューンが敗北した十二月十五日に次のような声明を発表した。

「広東省では、ソビエト権力が五つの地域で強固にもちこたえている。・・・部分的な敗北にもかかわらず、運動は発展しつつある。・・・」

ところがソ連共産党（スターリン）・コミンテルン・中国共産党の一連の失敗の責任は、すべて瞿秋白に帰せられて、彼はコミンテルンによりモスクワに召喚された。

毛沢東が井岡山にはいってから一年あまりがたった一九二八年の冬、一連の重要文書が彼のもとにとどけられてきた。それはこの年の夏、モスクワで開かれた中共六全大会の諸決議だった。南昌蜂起、広東コンミューンなど、一連の武装蜂起の失敗の結果、党代表数十名は中国を脱出してモスクワへと向かい、そこで、急遽、大会を開いたわけである。毛沢東は、決議に目を通して、その内容に完全に賛成した。そこには毛沢東の行動を是認する内容が盛り込まれていたからである。

党書記は、瞿秋白に代わって新たに向忠発が選ばれるとともに、そのほか李立三（宣伝）、周恩来（軍事）、劉少奇（労働運動）、らが重要ポストを占め、毛沢東も中央委員の職を回復した。党の指導権は主として宣伝部長李立三の手にあったが、この新指導部は「現在のところ、革命情勢の高揚はみられない」ということは認めたものの、なお「機が熟せば、全国的な規模での（プロレタリアートによる）武装暴動を提唱する」という路線を堅持していた。

一九二九年、アメリカのウォール街の株式大暴落に端を発した大恐慌は、またたくまに全世界に波及して世界を混乱におとしいれた。中国では、国民党による北伐の完成にもかかわらず、たちまち大規模な内戦が生起し、二九年から三〇年にかけて社会の混乱はますます大きくなっていった。

二九年十月、こうした状況のなかで、コミンテルンは中国共産党に対して、「新しい革命の高まり」が到来しつつあることに注意を喚起し、かつ、新たにとられるべき行動について、いくつかの示唆を与えた。そして三〇年にはいると、党中央を指導する李立三は、これに応じて、「李立三路線」という言葉で知られる「一省ないし数省の首先勝利」という有名なテーゼを打ち出したのである。もともと李立三は、農村における活動に対して、ほとんど関心をもたず、また評価も与えてはいなかった。【中略】

プロレタリアートのストライキと都市における武装蜂起によって一省または数省で最初の勝利を獲得し、さらにそれを全国的な革命の昂揚へといっきに結びつけていくというのが、かれの提出したテーゼだった。そして、まさにこうしたテーゼに立って、李立三は、三〇年六月、ついに長沙占領をふくむ大都市攻撃の具体的な指令を発したのである。

当時、党中央は上海にあり、この国際都市で地下活動をつづけながら、各地に指令を発し、またモスクワと連絡を保っていた。三つの軍団を組織し、軍事行動を開始した。第一軍団は南昌を、第二軍団は武漢を、第三軍団は長沙を攻撃した。

一九三〇年七月、まず第三軍団の長沙攻撃から始まった。しかしこ

れらの作戦はすべて国民党軍によって打ち破られてしまった。李立三路線の完全な敗北であった。

コミンテルンの反応と蔣介石の決意

しかし、この李立三路線の敗北について、コミンテルンの受け取り方は、少しちがっていた。なるほど李立三はほどなくモスクワへと召喚され、その責任をきびしく追求されたが、それはやはり李立三個人の指導の失敗に限局され、戦略そのものの検討についてはあいまいのうちに看過された。

むしろより重要なことは、長沙攻撃以後の党内の混乱と、そして党中央の決定にかならずしも十分に従わないかに見える地方共産党権力の存在だった。党中央の権威と権限を確立し、かつこうした中国はえぬきの共産党員とはくらべものにならないほどマルクス主義理論に精通した新指導部を再建することが、緊急の任務と考えられた。

こうして、ふたたびコミンテルンのあと押しのもとに、陳紹禹（王明）、秦邦憲（博古）、張聞天らを先頭とする、いわゆる「二十八人のボルシェヴィキ」＝モスクワ留学生派が新たに指導部を構成することになったのである。（一九三一年一月、四中全会）

スターリンは、「唯一の政府に組織された権力」、「革命の組織的中心」たる武漢政府と大衆のあいだの結びつきを強化することが、中国共産党の任務であるとした。ところが中国では、大衆はますます鋭くこの政府と衝突するようになってきた。なんとなれば、この政府はスターリンの言葉とうらはらに、大衆を支持しなかったばかりか、大衆が自分たちの利益のために戦うことに反対したからである。大衆組織はひじょうにうまく自分自身の道を行った。「政府と大衆のあいだの分裂は、いまひじょうに広くなっている」と、江西省の状態を調査するために送られた国民党の特別委員会はこう報告している。

こういう状況の中で、陳独秀には、のこされた唯一の道は共産党が国民党から完全に引き揚げることだということが、ようやくわかってきた。（『中国革命の悲劇』下　４２２頁）

スターリンは彼の「革命的義務」を果たした。これからは彼らのあわれな犠牲者、お人よしと無知の中国共産党指導者だけが、この巨大な歴史的悲劇の責任者である。このことをがなりつづけることがコミンテルンのすべての三文文士の「革命的任務」となることであろう。しかしスターリンとブハーリンが中国共産党に、史上最大の革命運動のひとつをめちゃめちゃにする政策をおしつけることができたとしても、彼らの意志を歴史のうえにおしつけることはできなかった。

（一九二七年）七月十五日、国民党政治会議は国民党内のすべての共産党員に、共産党籍をすてることを命じた。それから四日のちの軍事会議は全軍隊にたいして同じような追放を命じた。この命令をきかないものに対しては、「容赦ない処罰」を課した。数日間処刑隊はこの追放命令をしかるべく強調した。命令に服することをこばんだ共産党員‐彼らのいく人はそうしたが‐は逃亡せざるをえなかった。かれの地位の完全な絶望を知った陳独秀は、中央委員会主席を辞任した。彼はこう書いている。

「コミンテルンは一方ではわれわれに自分の政策を実行せよと望みながら、他方ではわれわれに国民党から撤退することを許さなかった。事実どうにもならなくなった。私は私の仕事をつづけることができない。」

スターリンはいま一〇年まえのこだまのように、武漢の崩壊のあとについてこう書いている。「中国共産党は六ヶ月前に『国民党指導者を打倒せよ！』というスローガンをかかげるべきだったか。それは間違いである。それはひじょうに危険な、あぶない手段となるからだ。それは共産党が大衆に近づくことを困難にするかもしれない。なぜならば、大衆は当時まだ国民党の指導を信用しており、そんな

ことをすれば共産党は農民から孤立化するからである。【中略】」

ここにスターリンがたったひとつ見おとしていたことがある。国民党がみずから「信用を失い」「頂点」に到達しつつあり、共産党がおとなしく待機しながら、その真の性格を大衆に知らせまいとしているあいだに、国民党の反革命は大衆運動の組織を成功裡に粉砕してしまった。労働者・農民はテロの打撃から身をまもるのがせいいっぱいで、共産党がいま「正しく行動しつつある」ことを知る余裕はもはやなかったのだ。

トロツキーは大衆運動の最高にもりあがったとき、いまただちに労働者・農民・兵士の会議（ソヴェト）をつくれと主張した。それは大衆の教育のための、敵の陣営からきた一時的な同盟者に対して警戒心を発達させるための自衛機関、かれら自身の力、かれら自身の組織、かれら自身の旗印、かれら自身の武器によって防衛から攻撃に転じさせるための自衛機関を、大衆に与えるためだった。この道、そしてこの道のみが反革命を絶滅にみちびくことができたのだ。ところが、それは当時スターリンの指導部によって遮断されてしまった。彼らは「唯一の政府権力」「革命的国民党」の信用をおとし、それを打倒することになるすべての企てを禁圧した。

陳独秀のはげしい言葉によれば、中国共産党は「過去においてはただいかに屈服するかということだけを学んできた」が、こんどは「退却が必要なことを理解する」機会さえ与えられなかった。彼らの勢力はテロの歯によって殺害され、分散させられた。この今になって中国共産党は突然ペースをかえろという命令をうけた。彼らはなにが悲劇にみちびいたかを発見し、かれらの敗北の大きさをはかるために足をとどめないで、コミンテルンの政策は完全に正しかった‐（スターリン指導部の無謬性はどんな代価をはらっても保存されなければならぬ！）‐失敗の責任は中国共産党指導部の「サボタージュ」にある、武漢における最終的敗北は革命を新しいより高い段階にすすめた、と証言することをよぎなくされた。

コミンテルンが主要な犠牲羊としようとした陳独秀はすでにやめさせられた。党の新しい政治局は瞿秋白・張国燾・李立三・周恩来・張太雷・李維漢を包含していた。彼らのすべては、党と革命をとらえた悲劇に対してそれぞれ重い責任をわかちあっていた。そこには（一九二七年）八月一三日ピケット隊の武器の返還を懇請するため蒋介石の上海司令部に行った周恩来がいた。五月二一日の翌朝、長沙の郊外から農民の退却を命じたところの、当時共産党湖南委員会主席の李維漢がいた。かれらのすべてはモスクワの援助をひきつづきうけようとしていた。そのために実際には、モスクワからの命令を忠実に実行したことが主要な罪状になった。陳独秀その他のものに、いっさいの責めをおしつけようとした。この新しい「指導者」たちは、これまでただ攻撃の時期に退却することだけをならってきたが、こんどは退却すべき時期に攻撃しなければならぬと命ぜられたのである。

昨日まで「日和見主義者」といわれた人々は、トロツキーのように革命の高潮期における断乎たる階級闘争の政策、ソヴェトの創設、国民党の把握から共産党を解放することを要求した人々であった。この同じ言葉がこんどは、再びトロツキーのように、革命の退潮期における蜂起の政策は、生きのこった革命幹部を破滅させ、党を大衆から完全に分離させるだけだと反対した陳独秀のような人々に適用された。除名された陳独秀は新しい中央委員会に対して「大衆の革命気運は昔のように高まっていないことを指摘しつつ、国民党政権はいますぐ容易に打倒できるものではない、時期はずれの蜂起は党の力を弱め、それを大衆からますます切り離すだけだ」という手紙を書いた。彼はつづけていう。「もちろん彼らは私の意見を考慮にいれなかった。そして私の言葉を冗談だと思い、それは私がまだ日和見主義的誤謬を糾正しない証拠だとくりかえしていた。」

革命軍は冷淡な民衆の前で、彼らの旗である国民党の旗をふりな

がら、町を撤退し、南に進んだ。民衆は、ずっと前から国民党の旗テロの表徴とみるようになっていた。民衆はすでに蒋介石がそれと同じ旗をたかくあげ、六月には朱徳が同じことをやったのをみている。それゆえ、彼らには葉・賀の軍隊もただ「第三の蒋介石軍」にすぎないと思われた。葉挺・賀竜は二〇〇畝をこえる土地は没収すると約束した。それは地主の圧倒的な部分には手をふれないという約束と同じことだった。

次回では、この「革命状況」を踏まえて、成仿吾の文学論の中の「革命」を、この時期の魯迅文の中の「革命」とくらべながら、考察したい。そこでは丸山昇の指摘は有益であろう。

〈参考文献〉
金冲及主編、狭間直樹監訳『周恩来伝』阿吽社　京都一九九二
中井政喜『一九二〇年代中国文藝批評論』汲古書院二〇〇五
ハロルド・R・アイザックス著、鹿島宗二郎訳『中国革命の悲劇』下　至誠堂一九六六
野村浩一『人民中国の誕生』（中国の歴史９）講談社一九七四

§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§

第18号執筆者紹介（掲載順）

香月　隆（かつき　たかし）脚本家、荻野綾子顕彰会会長
魏　建（ぎ　けん）中国郭沫若研究会副会長、山東師範大学教授
岩佐　昌暲（いわさ　まさあき）九州大学名誉教授
内田　知行（うちだ　ともゆき）大東文化大学教授
成家　哲郎（なりけ　てつろう）大東文化大学人文科学研究所
上村　京子（うえむら　きょうこ）声楽家。上野学園大学名誉教授
萩野　脩二（はぎの　しゅうじ）関西大学名誉教授

郭沫若とタゴール

上村　京子

会報第十七号ご掲載、大久保洋子氏の、「郭沫若とカピール」を拝読して、其処にタゴールの名が出てまいりました事に驚きました。

実は私がタゴールの詩に出会いましたのは一九五五年、郭沫若のそれに遅れること四十年、私にパリ留学中の事でございます。サン・スュルピス寺院に程近い書店で、ふと見付けた一枚の小さなカードに記されたタゴールの詩、

願わくは我が生涯を、
ただ素朴にして直ぐなるものとなし給え。
一管の葦笛の如く、
御身が調べもて、
それを満たし給わんことを。

と訳して大切に日本に持ち帰り、カードは今も机上を飾っております。

タゴールがインドの大詩人であり、ノーベル賞受賞者であることは存じておりましたものの、それ以上に調べようともいたしませぬまま、今日に至りましたが、此の度、大久保洋子氏のご記述に接しまして、タゴールの存在が再び私の中に蘇ってまいりました次第。改めてその詩を読み返しながら、この小さな一枚のカードが、郭沫若の深く幅広い思想の夜空を横切る流れ星の一瞬であったのかと嬉しく存じられるところでございます。

§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§

劉　建雲（りゅう　けんうん）日本大学　非常勤講師
横打　里奈（よこうち　りな）二松学舎大学　非常勤講師
齋藤　孝治（さいとう　こうじ）著述家、中日文化研究所所長

冰心と郭沫若

萩野　脩二

私は郭沫若に関して何も述べるものを持たない。畏友・岩佐先生のお申し出によって、何か埋め草となることを述べようと思う。が、実に苦しい。

冰心『晩晴集』

仕方なく、私の手元にある二冊の瀟洒な薄い本を見比べた。一冊は冰心の『晩晴集』、もう一冊は郭沫若の『東風第一枝』である。メモによれば、『晩晴集』（天津百花文芸、一九八〇年九月、百十七頁、〇、二九元）は、一九九一年十二月十一日に関大前の古本屋「文砦」で百円で買っている。郭沫若の『東風第一枝』（四川人民出版社、一九七八年九月、七九年八月第二次印刷、七十五頁、〇、三九元）の方は、最近買ったものである。

どちらも〝四人組〟粉砕後の高揚した意気込みと解放感からの詩文が収められていて、小冊子ながら大変貴重である。

郭沫若
『東風第一枝』

冰心著『晩晴集』は、一九七六年から一九八〇年にかけて冰心が書いた散文十三篇を集めたもので、一九七九年五月八日の「後記」がある。小さな冊子ではあるが、中身はかなり大事な文章が収められている。第一部は毛主席と周総理の追悼の文章。第二部は老舎や鄭振鐸などの追悼の文章。そして第三部が「我的故郷」「我的童年」などの思い出の文章である。以上の文章は、もちろんすべて『冰心全集』（卓如編、福建海峡文芸出版社、豪華珍蔵本九巻本、一九九四年十二月、海峡文芸出版社）に入っている。

この第二部の最初の文章が「悼郭老」である。

冰心が老舎について書いた文章は、すでに幾つかある。鄭振鐸に触れた文章も幾つかある。巴金について触れた文章（手紙を含めて）など私の知るところ五十六篇もある。だが、郭沫若について書いたものは、この一篇だけのように思える。この文章はもともと、『人民文学』一九七八年第七期に掲載されたものだ。〝一九七八年六月二十日清晨〟に書かれたと記している。すなわち郭沫若追悼の文章で、今、この文章について少しく紹介しようと思う。

〝一九七八年六月十二日十六時五十分、中国当代科学文化の巨星が万丈の光芒をなびかせて我々の頭上を飛び去り、落下した。／彼は決して落下しない、彼は永遠に落下するはずがない。彼は永遠に空漠たる宇宙の空を飛び続ける。〟と、この文章の出だしである。

そして、六十年前に書かれた郭沫若の長詩「星空」を引用する。「星空」にうたわれた〝天才〟への呼びかけから、郭沫若自体の熱情、縦横無尽の人生、前進的で革命的そして創造的な一生を思い描くのである。思えば冰心は一九二〇年代から郭沫若の詩文を読んでいたが、相知り合ったのは一九四一年から四六年の抗戦時期の重慶であった、という。冰心は当時病を得て郊外の歌楽山にこもっていた。多くの友人が山にのぼってきて冰心を訪ねたが、そのなかに老舎、馮乃超らと一緒に郭沫若も来たことがあった。その時しばらく話し合ったが、数日過ぎて老舎が郭沫若が冰心へ書いたものだと「五律」を持ってきたという。確か、こう書いてあったという。

怪道新詞少、　げにも新詞の少なきことよ
病依江上楼。　病みて江上の庵にこもる
碧簾鎖煙靄、　碧きカーテンは濃き霧を閉ざし

紅燭映清流。　赤き灯火は清流に映える
婉婉唱随楽、　のびのびと楽しく歌い
殷殷家国憂、　うつうつと国家を憂う
微憐松石瘦、　松石の痩せたるを憐れまず
貞静立山頭。　凛として静かに山頭に立つ

冰心が所蔵していた友人たちの書画などはこの十年来失われたというが、この郭沫若の書も失われた。もちろん文革による被害である。

最後に冰心は、郭沫若が〝四人組〟粉砕後、全国科学大会で「科学の春」という閉幕のことばを書いた後、中国文聯常務委員会拡大会議のために書いた「衷心からのお祝い」を書いて、我々と永遠の別れを告げたことを指摘する。そして言う、〝彼は我々が断固として真理を堅持し、人民大衆と心を合わせ、党と人民の要求に照らして筆を執り、筆を執って戦闘に投じ、〝四人組〟が設置した数々の精神的な首枷を足元に踏みつけ、深く彩り華やかな我々の偉大な時代を深く反映することを要求している〟と。

以上が冰心の郭沫若追悼の文章の紹介である。

私には冰心の筆使いが面白いが、それは人との交流を詩文から描く態度に現れている。短期間に少ない資料を駆使して郭沫若の人となりを丁寧にたどっている。政治的で戦闘的であった郭沫若の一面をとらえながら、決して政治的で戦闘的な文章に堕していない。あくまでも自分の分を越えない冷静な文章に思える。

ここに記憶として引用された「五律」は、ある人の教示によれば郭沫若の『潮汐集』に収められており、一九四一年七月十六日に作られたことになっているそうだ。もちろん『郭沫若全集』第二巻に入っているそうだ。ただ、郭沫若が冰心に触れた文章がどれくらいあるのか、不勉強な私は知らない。これが郭沫若が冰心に触れた唯一のものかもしれない。それはそうと、革命的で戦闘的な一生を送ったと称される人（鄧小平の郭沫若追悼会での悼辞）の文体と、冰心のこの文体とが違うことは明らかであろう。

私が言うことは、たったこれだけのことに過ぎない。つまらぬ感想に過ぎないから、些末なことを付け加えよう。

それは、冰心の『晩晴集』の中の文章は、すべて〝四人組〟粉砕後のことが書いてあるのだが、華国鋒のことにはほとんど触れていないということである。唯一「後記」で次のように言うくらいである。

〝この年の十月、華主席をはじめとする党中央が一挙に〝四人組〟を粉砕した。霹靂一声、雨があがってからりと晴れた。山川もまた明瞭、空気もまた清浄。長年あっていなかった友ともまた会え、私の心にたまっていた情感もまた筆先に湧き上がって来た。……〟と。

〝この年の十月、〝四人組〟が粉砕された。霹靂一声、雨があがってからりと晴れた。山川もまた明瞭、空気もまた清浄。長年あっていなかった友ともまた会え、私の心にたまっていた情感もまた筆先に湧き上がって来た。……〟と。

見事に〝華主席〟が削除されている。

私の関心は、そこでこうなる。郭沫若の「科学の春」は今ではどうなっているのであろうか。「衷心からのお祝い」はどうなっているのであろうかということである。

『東方第一枝』に入っている「科学の春」の出だしは次のようなものである。

〝親愛なる同志諸君！／英明な領袖華主席と敬愛する鄧副主席の重要な講話、方毅同志の報告に対し、私は衷心からの擁護と熱烈たる歓呼を表明する。……〟

これは初出の『人民日報』一九七八年四月一日の掲載の文章と同じであるが、今見ることのできるＷＥＢでは、〝親愛なる同志諸君！

／党中央の指導者の重要な講話に対し、私は衷心からの擁護と熱烈たる歓呼を表明する。……〃となっている。やはり〃華主席〃は消されているのである。

また同じく『東方第一枝』の「衷心からのお祝い」も、その出だしは次のようである。

〃同志諸君！／華主席と党中央が全国各民族人民を指導して治国の新しい勝利を奪取し、全国各戦線が奮発し強気を図り、新しい時期の総任務を実現するために新しい長征を始めた時に、中国文学芸術界聯合会第三次全国委員会第三次拡大会議が全国人民の嘱望の中で開かれた。……〃

これも初出の『文芸報』一九七八年第一期の文章と同じである。今は、どうなっているであろうか、私は気になっている。当時の〃四人組〃粉砕後の解放され高揚とした気分はどの作家の文章にも〃英明な領袖華主席〃という言葉に現れていた。それが時代というものであろう。ただ、その原文を都合よく書き換えてしまうというやり方に、私は不信の念を禁じ得ない。

しかし、そんな大それたことを言っても、さして意味があるとは思えない。ここで少し私が気になっていたのは、郭沫若が「科学の春」を書いてすぐ「衷心からのお祝い」を書いていたことだ。確か八十六歳にもなる老人だが、さすがに常人とは違うものだと私は感心していた。そのことについて触れた文章が最近あったので、周知のことかもしれないが、一応紹介しておこう。

それは、劉錫誠の「還其批評家的真実品格」という文章だ（『文芸報』二〇一七年二月二十二日）。この文章は、党宣伝部文芸局局長であり中国文聯副主席で評論家であった林默涵について書かれたもので、『林默涵文論』が出版されたのを機に優れた批評家として林默涵を再評価しようとする文章である。その文章の中に、郭沫若の「衷心からのお祝い」について触れた部分がある。

中国文聯理論研究室研究員の劉錫誠は次のように言う。

一九七八年林默涵は六月に開く予定の中国文聯第三期第三次全国大会拡大会議の宣伝組組長に劉を、そして副組長に鄒荻帆を任命した。そこで劉は謝永旺と閻綱と一緒に入院中の郭沫若のために「衷心からのお祝い」という大会祝辞を起草した。このために劉は前後二回北京病院に行き、郭沫若夫人于立群同志に上部機関の講話文案を送った。彼女本人と郭老に伝えた意見とを聞き取り、戻って再び林默涵、張光年、馮牧の三人の準備組責任者に報告した。郭老のこの講話原稿は、彼が修正改定に同意した最後の文案である、と。

最終的に郭沫若が承諾したのであるから、郭沫若の文章となることと言うまでもない。ただ、名声と地位とがある彼はこういう儀式的な場での挨拶を書かねばならなかったのだ。地位と名声があるからこそ、勝手な文章を書くことが出来ないともいえる。文章が社会的に公表される以上、誰だって勝手な文章を書くわけにはいかない。だが、郭沫若と冰心と比べた時、党官僚の干渉が郭沫若の文章には入っていたということになる。

私は〃華主席〃という言葉があるかどうかという些末な事象に郭沫若の政治性を見ているのではない。それは当時のなせる業に過ぎない。ただ、郭沫若ともなると個人の感慨だけではない要素として党の干渉が入るという事実を指摘したいだけだ。そして私の勝手な想像によれば、そういう事実には郭沫若なりの苦心があったに違いないと感じる。これが苦心かどうか、むしろ早くから革命的で戦闘的で政治的な性格の郭沫若にとっては当たり前のことだったのかもしれない。

私はつくづくと冰心と郭沫若の二人の性格の違いを感じるのであった。

二〇一七一〇二六

（追）資料収集と確認のために岩佐昌暲先生と鎌田純子さんのお世話になった。記して謝意を表します。

資料紹介——大正期の岡山における中国人留学生の生活

劉　建雲

手元には、『郭沫若学刊』一九八六年第二期掲載の「資料　岡山第六高等学校紹介」というコピーがある（以下、「資料」と略記）。大正期における岡山の風景名所や地形天候、文化教育施設、六高周辺の住環境、留学生の生活水準、後輩の参考になるための授業に使う教科書と各科目の難易度の紹介、留学生の一般的な健康状況、課外活動、日本人教職員や生徒との関係、留学生同士のクラブ活動など、当時の岡山と当地在住の中国人留学生生活を知るのに貴重な情報が載っている。しかし、この「資料」は、二十世紀八十年代に上記の中国における郭沫若研究専門誌に紹介されたものの、現在中国でもすでに簡単には手に入れない、希少な資料となっている。よって、ここに翻訳・紹介し、諸賢の研究の参考に資すればと願う。

「資料」のはじめに「編者按」というものがあり、それによれば、郭沫若は一九一五年から一九一八年にかけて日本岡山第六高等学校（以下、六高と略記）に留学していたが、多くの研究者は当時のこの学校のことをほとんど知らない、よって、一九一六年発行の『中華留日六高同学会会報』（以下、『会報』と略記）第二号に基づき、六高に関する内容を抜粋し紹介しておくとある。編者は澄塘と署名していて、「資料」の「資」の字が横になっているところは、三十年前の中国の製版事情を窺わせる面白い一面もある（図1参照）。「資料」の紹介内容は完全完備のものではいない。例えば、二のaは、「毎年よく使うすべての書物は下記の表を参照ください」とありながら、該当の表が欠落している。また、ところどころに出てくる「附記」、「備考」は『会報』のなかでどんな形で出ていたのかは不明であり、『会報』そのものの掘り起こしと収集が課題と思われる。以下、全文を翻訳紹介する。

【図1】

一．会員状況

a．会合

岡山に留学しているのは、六高の同人以外にまた医専・師範などの学校があり、計十数人いる。岡山に中国人留学生倶楽部があり、留学生同士はよくここに集う。定期的な会合は以下の

三種類がある。

（1）新年会：毎年の一月一日、元日に行う。

（2）送別会：卒業諸君を送る会で、毎年六月に行う。

（3）歓迎会：新入生諸君を迎える会で、毎年九月に行う。

すべての会員は特別な事情がない限り、全員出席し演説する。会合の雰囲気はとてもむつまじく楽しい。また、従来の話として上記三種類の定期的な会合の時は会食が必ずあるが、近くには中華料理屋がないため、去年五月七日以降は茶会に変更することに決議した。

（附記）今年の新年会は、席上各会員が自由に自分の故郷の風習と新年の様子を紹介し、最も楽しかった。某君はバイオリンが得意で、また吹奏の得意な人は笛を吹いてそれに伴奏し、その他はみな音を出して合わせる。音楽と掛け声、笑いやはしやぎが部屋に充満していて、踊りは屠模君がもっとも上手で、手足の動きや表情、目つきなど、一々桑林の舞に合し、経首の会にあたる。

b．スポーツと遊戯

これに関して特に設備はない。同人の人数が少なく（十一人のみ）、クラブには資金もないためである。

土曜日にはボートパーティーがあり、学校の前の旭川にボートを浮かばせるのである。川の深さは三メートルぐらいで、太陽が照らすと泳いでいる魚が数えられるほど水がきれいで澄み渡っている。水面が穏やかで、風があると細波が立ち、おのずと文章が広がったように見える。流れは緩やかで静かに後楽園の脇を通り、数キロ下ると海に入る。後楽園は日本三名園の一つである。川岸には岡山城という旧いお城がある。高くそびえたお城と、青々とした樹木が水に映っていて、まるで水晶宮殿のように見え、同人はよくあの世界へ行ってあそこの主人になりたいと夢話をしていた。ボートパーティーの時はボート二隻に分乗して競い合い、水しぶきが飛び跳ねて服が濡れたりして、楽しくてつい夢中になり、戻ることさえ忘れるときもあった。また、柳汝昭・楊子驤二君は本校の柔道部に所属し、柔道の稽古をしている。同人の中ではスポーツや遊戯に熱心な人が多く、人の遅れを取ってはいけない思いである。

c．留学生の健康状態と現地の天候

健康状態：健康の問題はとても言いにくいところである。こちら在住の同人のなか体質の弱い人は半分以上あり、以前中途病気で帰国する者はしばしばあった。それは同人が上記のスポーツ、遊戯に熱心で怠らない原因でもあるのである。我が国の若者の身体はだいたい頑丈ではない。これは最も悲しい。病弱は「六極（訳者注：六つの災い）」の一つであり、強健は天地運行の要である。任重くして道遠き、歳月は流れのごとく、君子も尚みずから努め励んでやまないのに、望むは六高の同人諸公なり。

現地天候：岡山市は北温帯地域に位置し、南には四国山脈があり、北には中国山脈が横わたっている。それで、気候は温暖で、年間の雨量も少ない。隣接している瀬戸内海は学校からただ十二キロほど離れていて、たとえ真夏の朝晩涼しい時でも蚊が多くて大変である。民間では「蚊山」と呼ぶところがあるが、日本語の発音が近いからである。冬は大して寒くはなく、雪はめったに降らない。

二．授業の状況

a．毎年よく使うすべての書物は下記の表を参照ください。（訳者注：表はなし）

b．筆記を取らなければならない科目は、表1の通りである。

【備考】一、二部にはイギリス人教師、三部にはドイツ人教師がいて、彼らの授業にも筆記を取る必要のあるものもあるが、

表1には記入していない。各科目の難易度は人により異なり、とても一概には言えないが、我が国の学生にとって共通に苦労する科目には下記の数科目がある。

一部：日本語、歴史
二部：鉱物、製図、数学
三部：動物、植物、数学

だいたい筆記が必要な科目はみな難しい。原因を言えば日本語力が足りないからにすぎない。予科の諸君はくれぐれもこの点に留意するよう願う。

【表1】

	1年	2年	3年
一部	東洋史 日本文典	西洋史 文典	
二部	鉱物 地質 文典	物理	測量 物理
三部	動物 植物 数科　代数　幾何 文典	動物 植物 数科　代数　幾何 文典	数科　微積分　解析幾何 理化

数学の演題はなかなか難しい。言うとおかしいが、予科の時は演題が少なかったので、本科に入ると本当にどうしたらいいかわからないほど大慌てする。

三．学校の状況

a．一般的な気風

学校の気風はとくにこれといった特色がなく、形式を重んじ保守的である。

b．われわれ留学生に対する処遇

教職員との感情はとてもむつまじい。日本人学生との付き合いは少ないが、表面上また何とかなっている。慣例として毎年六月に茶会があり、教頭岡野が（中国人留学生監督の名義で）主催し、校長およびその他の教職員はみな出席しない。

c．日本人学生が熱中していること

校内には学生の精神的・身体的鍛錬に関係する設備は充実している。柔道、剣道、文芸創作（校友雑誌に見られる者）、および演説などに熱中する人が多い。

d．特別に留意すべき事項

ほかならぬ、ただ現在予科に在学していてこの学校に志願する諸君に告げるのは、一高の制帽・制服はここでも通用するのみである。

e．図書館

規模は小さいが、蔵書が豊富である。閲覧の手続きと館内の規則は一高とほぼ変らない。

f．学校の普通の生活水準

校地は岡山市外にあり、学校の近くにはいわゆる「下宿屋」はない。同人が住んでいるのはみな貸間か貸家である。生活水準はたいして高くはなく、六畳の貸間は家賃月二元、四畳半は約一元五十銭程度である。食事は「賄所」というところがあり、三食任せて一人当たり毎月七、八元にすぎない。届けてもらうのもよし食べに行くのもよい。貸家の費用はこれより多少安いという。

学校の所在地は岡山市外にあるが、市街地と隣接していて、買い物にとても便利である。学校の周辺に住宅が多く、商店も少なくはない。日常の小物や食品などは市街地へ足を運ぶ必要はない。

学校は田んぼのど真ん中にあり、背後には操山がそびえたっていて、周辺は青々としている。よく十五夜に遊びに出かけるが、こんな景色と清風明月は一文も払わずに満喫できるのである。

四．岡山市と、付近の学校・工場・会社・銀行の名前、および所在地は下記のとおりである。

a．第六高等学校：大字富国

岡山医学専門学校：同上、内山下（文部省直轄の学校。現在同校に在学している中国人留学生は十一名）

【備考】岡山県では明治五年の学制が頒布されてから多くの小学校が新設され、教育事業はどんどん発達している。今現在第六高等学校と医学専門学校のほか、師範学校、中学校（公立は四、私立は六）、実業学校（甲種は六、乙種は二）、その他のいろいろな学校二百五、小学校五百六十六、幼稚園二十二がある。

岡山には県立戦捷記念図書館があって、岡山県庁前の弓之町に位置している。明治四十五年日露戦勝記念として建てられたものである。和漢洋の蔵書が豊富で、一般人の閲覧に供する。

b．工場、会社、銀行の名前と所在地（略）

【備考】岡山に有名な公園がある。後楽園と言い、古京町に位置し、日本三名園の一つである。最初は「御茶屋敷」という名だったが、明治四年に現在の園名に改称された。半径およそ五百メートルで、周囲は竹柵で囲まれ、西側を旭川が流れ、川を挟んで岡山城と対峙している。園の中央には花交の池があり、水が清らかで澄み切っている。池の左側に小山が立っていて、唯心山という。高さ数メートルで、いろんなところに怪石があり、観光客が登って周辺を見渡す。園の北西部に樹木が茂っていて、鬱蒼と天を覆い、その奥に猿や野鶴が鳴き騒ぐ。授業のないときに同人がそのなかを遊んでいて、まるで山奥で木石と寝食を共にし、野生動物を仲間とするような思いである。

〔附〕岡山第六高等学校中華留日同学録

氏名	字	年齢	学科	学年	本籍地	国内宛先
柳汝昭		27	医	3	広東	香山県茅湾外埔郷柳宅
高　銛	硎若	24	工	3	浙江	江西南昌状元橋高宅
周　敏	遜吾	28	工	2	湖南	瀏陽東多永和市熊元興号転
成　灝	仿吾	19	工	2	湖南	新化県澧渓成延慕堂
陳　中	君哲	28	医	2	浙江	紹興西郭門外賞粉村郡伯第
李希賢	閃霆	27	法	1	湖南	永州北門街袁玉興号転
張　枏	木生	24	工	1	山東	濰県高里街春和堂転寨庄
徐世明		24	工	1	湖北	漢口大智門東方公司
屠　模	抗雲	19	理	1	江蘇	武進城内東門白馬三司徒屠
楊子驤		19	医	1	広東	香山外界涌義昌号転
郭開貞	毅夫	24	医	1	四川	楽山城内県街清和店転沙湾郭宅

医学生と文学者

―陳俐「郭沫若：在文学与政治背后的医学眼光」を読む

横打　里奈

小稿は今年復刊された『郭沫若研究』（２０１７年第１輯）に発表された陳俐「郭沫若：在文学与政治背后的医学眼光」（郭沫若：文学と政治の背後にある医学の目）の紹介である。陳俐氏は四川省楽山師範学院教授・四川省郭沫若研究中心に所属し、新鮮な視点の郭沫若研究を展開してきた方である。この論文は、２００８年９月１日、九州大学で行われた「郭沫若九大留学九〇周年記念　郭沫若研究国際学術集会」の発表論文集『郭沫若の世界』（岩佐昌暲・藤田梨那・武継平編、花書院、２０１０年）に収録されたものに基づいている。再録にあたって章題がつけられ、本文にも若干の修正が加えられている。（なお、２００９年に『韓中言語文化研究』で、同題の論文が掲載されているが未見。）

さて、同論文は「引言」（序）を含む五節から構成されている。

「引言」は、郭沫若を論ずるに当って筆者の観点を述べたものである。陳氏（以下、筆者とも書く）はまず郭沫若の魯迅論の紹介から始める。陳氏によれば郭の魯迅論で最も優れたものは「契訶夫在東方」（アジアのチェーホフ）であり、氏はこの文で郭が「魯迅もチェーホフも共に医学を学んだ」と述べたと書き、その郭の魯迅論を引用している。

「彼らは二人とも近代医学を学んだ。医者の冷静さは彼らの怒りを鎮め、手術のメスと顕微鏡の運用は、彼らが病気と病状に辛抱強い、容赦ない解明、検討を加えるよう訓練した。二人の解明は同じように鋭利で詳細であり、また沈黙の深い同情を含んでいた。だが二人は共にカルテは書くが薬は処方しない医師だった。」

医学と病人の角度からする郭の魯迅評価は、われわれの郭沫若評価にも啓示を与える、と陳氏は言う。陳氏はまた、中国現代文学史上にも沢山の「文学者」と呼ばれる人がいたが、彼らは必ずしも文学を業としていたのではない。彼らは文学の業績で文学者と呼ばれるようになり、その身分が定まり、本来持っていたその他の身分は忘れ去られたのだ。郭沫若も同じで、彼は最も早く文学者として成功したため、文学者として評価されるようになり、医学を学んだことは軽視されるようになったと、指摘する。

第二節「作为〝医科学生〟和〝病人〟的郭沫若」（「医学生」と「病人」としての郭沫若）は、その問題意識を彼の文学活動と文学作品を例に展開したものである。陳氏は、まず郭沫若がなぜ「棄医従文」（医学を放棄し文学に従事する）ことになったのかから論を進める。

郭沫若が医者への道を放棄した直接の原因は、十七歳の年に腸チフスに罹り、そのため中耳炎となって聴力にダメージを受け、更に後、発疹チフスで聴力を損なったからである。これについて郭は「医学の発達した国なら、簡単に治ったはずなのに、中国に生まれたため結果として半聾者になった」と言ったという。陳氏は「中国の医学が未発達なため耳が不自由になり、今度は耳が不自由なために医者として中国医学の立ち遅れを変革できなくなった」ことを指摘する。陳氏の発言の意図は、「医学を学んだ人、難聴の病人」としての郭沫若という視点が、これまでの郭沫若研究の中で忘れられていることを批判し、その視点から郭沫若文学を再評価しようとしているのである。このことが本論文の主要な問題意識・テーマで、同時に価値ある問題提起だと私は思う。

また、郭沫若が最初から文学によって中国を救おうというような志を持っていたという従来の見方を否定し、郭が医者の道を捨てると決めた時には、一家の経済的安定を考えないわけではなかったこ

と、妻の安娜が棄医に強く反対したことも書き留めている。しかし難聴という生理的不可抗力の要因によって、本来の嗜好と「治病救国」についての民族的な思いは、郭沫若にとって打ち消しがたいものとなり、その崇高さを求める時代にあって「掃天下」は結局「掃一屋」よりもいっそう打ち込む価値があったのだと指摘している。

彼が医学の実習で触れた事物の刺激を受けて「骷髏」や「解剖室中」などの作品を書き始めたことも、陳氏は注意深く書き記している。また彼が「難聴」という病を抱えた病人であることが、彼の浪漫的性質や直感的思考を育てたことなども指摘している。

陳氏はまた、郭沫若は医学生として訓練を受けたことで、理性的思惟と科学的精神を養い、病理学と社会学の角度から病気の発生のメカニズム及び社会環境に注意を払うようになったことも指摘している。このことは、郭沫若の親族に結核で亡くなった者が少なくないが、彼はその原因を病理学の角度から分析し、家族に医学知識を教えている。また社会学の角度から教育程度が低く、基本的な防疫、医療知識のないことが病気をもたらしたと考えている。

十九世紀末、ボードレールの「悪の花」が出版され、都市を「悪の花」とみなす詩的イメージが全世界を風靡した。陳氏によれば、郭沫若はこの詩を読んで以後、頻繁に中国社会の病態を暴露し、社会を「大病院」ととらえる詩的イメージを大量に作り出すようになった。小説「湖心亭」や「孤山的梅花」などはその例である。彼は医学と社会改革の両刃の剣で国民性と民族の社会的病態を解剖している、というのが陳氏の意見である。

第三節のタイトル「早期小説中疾病意象的双重性质性」（初期小説の病気のイメージの二重性）の「二重」とは、医学と文学を指し、「疾病意象的双重性」とは、例えば「結核」のような病気が、郭沫若の文学にあっては医学的に描写されると同時にそこに新たな文学的イメージが付与され、文学的効果を強める技法を指す。

十九世紀末から二十世紀初頭にかけて世界的に流行した疾病である結核は、作家たちに巨大な精神的幻想を誘発するものであった。それは文学にとどまらず社会問題でもあったのだが、郭沫若は医学の知識で批判し、新たな隠喩として文学作品にとりいれた。陳氏はその例として「落葉」を挙げ、これを〝下半身〟と〝上半身〟の病の物語とみなしている。梅毒という〝下半身〟の疾病と診断された主人公が、過去のあやまちを悔い改め、伝染性のある疾病罹患者に献身的に尽すことで罪を贖おうとする。〝下半身〟の病である梅毒は非道徳の象徴という当時の隠喩であるが、主人公が医者となった後に、梅毒が誤診であると自ら診断して解決する点は医学の視点からのものである。しかし結局は結核という〝上半身〟の疾病に罹患したことで肉体が滅びるのであるが、これは不治の病という文学的な視点からのもので、主人公は助からないという悲劇性を持たせている。「残春」と「葉羅提之墓」も、同様の二重の視点から描かれており、「禁断の愛」として結核が描かれている。リアルな医学的視点からの描写と文学的な神秘性が付与される。「たいがい何かの情熱的な感情がまずあって、それが結核を誘発し、結核となって外化にするのだという。だが、情熱は挫折し、希望はついえるものである」というスーザン・ソンタグの『隠喩としての病い』からの一文を引用し、結核が強烈な伝染性を備えており、且つ当時の条件の下では治癒する方法がないという神秘的な性質をもったため、結核の罹患者は人が触れることの出来ない対象となった。「人力之上」では、タイトル通り人間の力が及ばない運命が描かれており、救われない登場人物たちは、社会病理学の立場で郭沫若が描いていると陳氏は指摘している。

これらの作品において結核の病態の医学的描写は具体的で、彼の病気と死についてはさまざまな隠喩で文学的に表現される。このような創作方法を陳氏は「二重性」と呼び、その背後には、「作家」郭沫若の中に「医学生」だった郭沫若の影響があると指摘している。

第四節「〝腐肉去尽，新肌発生〟的民族隠喩」（「腐肉を除き去れ

ば、新たな皮膚が生まれる」という民族的隠喩）は抗日戦争期に文化界指導者として活躍した郭沫若が、抗日の宣伝活動において医学的知識を活用・駆使したことを述べる。その例として陳氏はこの時期に郭沫若が書いた抗日宣伝の文章で「抗戦の過程は、腐った肉を除去し、新たな皮膚が生まれる過程だ」といった「医学講義」のような隠喩を繰り返し用いたことを指摘している。その一例として陳氏は散文「痈」（できもの）をあげる。郭は自分の右胸にできたできものを例に、できものは化膿しなければ治らないと述べ、膿みは社会の時弊であり、人はできものが破れ膿みが出てはじめて爽快になるように、社会の膿みを出し尽くして外敵と戦う抵抗力が強まる、など医学知識を応用して抗日を呼びかけているのだという。

第五節は「結語」は、建国後の郭沫若が、自身の作品から医学的視点を排除していったという創作態度の変化について簡潔にまとめている。

建国後の衛生・防疫状況の改善によって各種の伝染病は駆逐され、昔日の医者（社会の批判者、提言者）としての郭沫若にはもはや出番はなくなった。文学界でも「高、大、全」（崇高で偉大、かつ完全無欠）の人物像がますます増えていき、弱々しい疾病のイメージは見劣りするようになった。共産主義の理想は、必ず実現するという遠大な抱負と自信も、疾病の隠喩が生まれる土壌を根絶した。「このとき郭沫若の作品の骨格たる意気盛んな主旋律から疾病の影は徹底的に駆除された。社会を細かく観察する郭沫若の医学的視線もこの時から消え去った」という結論に至っている。

以上が陳氏の郭沫若論の概略である。最初に述べたように、本論は郭沫若の医師（＝治療する者）としての「身分」と、治療される病人（＝聴覚弱者）としての「身分」が、彼の作品や文学活動に与えた影響から、彼の文学を評価するというこれまでなされたことのない郭沫若論の試みである。さまざまな作品に新しい読解の可能性をもたらした本論は、郭沫若研究の視野を広げ、深めるものと高く評価したい。

最後に、陳氏の論旨と離れるが、私がこの論文を読む過程で感じた、私の個人的な問題意識に即した感想を二つだけ述べて文を終えたい。

第一は陳氏が「結語」で新中国建国後には、疾病を作品に書くことはなくなってしまったと書いていることに関してである。しかし、ソンタグが「前世紀の結核と今世紀の癌と、このふたつのものがかき立てる空想といえば、すべての病気は治療できるということが医学の大前提になっている時代にも、手に負えぬ気まぐれな病気」（『隠喩としての病い／エイズとその隠喩』（スーザン・ソンタグ、富山太佳夫訳、みすず書房、２０１２年、７頁）であるとするように、「結核」が根治の病となった現在では、「癌」や「エイズ」がそれに代わって不治の病とされていく。不治の病とし「癌」や「エイズ」で苦しむ人々がいる現代社会において、隠喩としての疾病が書かれた郭沫若の初期の作品は、現代でも十分読まれる価値があり、たとえ病名が現在は根治えきるものであったとしても、それはこれまでと変わらず隠喩として機能していることを読者は理解するのである。

第二は、疾病は身体だけでなく精神にも存在するという点である。郭沫若作品における精神の問題は、たとえば李怡氏が“歇斯迭里”的文学史意义——郭沫若的自我定位与我们对郭沫若的定位」（前出『郭沫若の世界』）で論じているように、避けては通れないものでもある。日本では明治から大正にかけて精神疾患という問題が社会・文学の中に大きく立ち現れた。この時期には、日本では神経衰弱を代表とする精神疾患に罹患する者が多かった。郭沫若は日本で神経衰弱を患い治癒克服のために、１９１５年当時日本で流行していた岡田虎二郎の『岡田式静坐法』を用いたと述べている。起床後と就寝前に三十分の静坐を行った結果、睡眠時間が延び、夢を見ることも減り動悸も通常にもどり、身体的な効用が確かにあったが、同時に精神上にも大きな広がりがあったとも述べている。更に、１９２

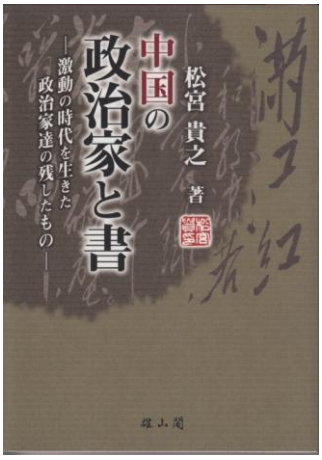
1年7月に上海から福岡に戻った郭沫若は、雑誌『創造』の準備をしていたその時に、田寿昌（田漢）と神田の映画館でドイツ映画の『カリガリ博士』を見たと記している。健常者として描かれていた主人公の若者が話していたことは、実は精神疾患者の妄想に過ぎず、悪者として描かれていたカリガリ博士は精神病院の院長であったという作品である。おそらく他人事ではなかったのだろう、映画の内容を郭沫若本人が詳細に記している。これは郭沫若だけでなく日本の知識人たちも同じように身心の疲弊の克服を試み「煩悶」していた時期と重なる。「煩悶」は明治から大正にかけて問題となったが、それは、国家に奉仕する知識人の公の悩みが個人的な悩みに移行しつつある時代である。私は、精神疾患は郭沫若留日期に流行していた病であり、当時の多くの知識人が罹患していたこと、更にそれに罹患した詩人たちの作品との比較を、拙論「大正詩人の自然観：根を張り枝を揺らす神経の木々」（『エコ・ファンタジー：環境への感度を拡張するために』河本英夫・山田利明編、春風社、２０１５年）で検討した。当時流行した精神疾患の問題が日本の文学に多大な影響を与えたものであったことも再考すべき問題であろう。

郭沫若は大正期に日本で神経衰弱に罹患した後、静坐によって神経衰弱を克服した。また、九州帝国大学医科で学んだ解剖学では、人体と向き合う体験もした。郭沫若にとっては、自己と向き合い、肉体としての「神経」を目にしたときに、精神としての「神経」を無視することはできなかったのであろう。郭沫若にとっての創作の源泉の一つに「神経」や「精神」があったからであろう。疾病という陰のイメージを文学の世界に取り込んだのは自然科学を日本で学んだことで客観的な視野を身につけたからと言ってよい。だからこそ、郭沫若が病人であったことを論じるのであれば、それは肉体だけではなく精神にまで及ぶ必要があるのではないだろうか。

会員の新著を紹介する

岩佐　昌暲

松宮貴之　著『中国の政治家と書』
雄山閣　／２０１７年９月／２３１頁／２８００円



松宮貴之氏は書家であり、仏教大学で書道実技、書論、日中書道史などを講ずる教員（非常勤）でもある。また当会会員として郭沫若の書に関わる論考を発表してきた研究者でもある。

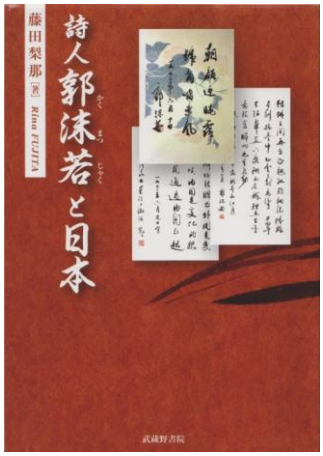
このたび、その松宮さんの最初の著書『中国の政治家と書』が刊行された。本書はその副題「激動の時代を生きた政治家たちの残したもの」からもうかがえるように、清朝から中華人民共和国の今日までの、書を能くした政治家（学者、文人も含んでいる）三十七名の書を解説・論評しながら、背景となる歴史も述べたものである。

退職後やりたいことの一つが書を習うことだった。残念ながらその希望はまだ果たせていないが、願望は胸にくすぶっていて、私には書を見ることは楽しみでもある。松宮さんのこの本には、取り上げたすべての人たちの書とその文字の解題がある。じっくり鑑賞するには小さすぎる図版だが、教科書に載った名画の写真が、いつか本物を見たいという夢を育てるように、これらの写真も本物の書への憧れは育ててくれる。

松宮さんが郭沫若の書に触れた第三章は、毛沢東の書や、毛沢東と郭沫若の関係も述べていて最も興味の引かれる章だった。詳しく紹介する紙幅はないが、毛沢東が長征を詠んだ詩「長征」は毛自身

によって書写され、彼の書の代表作と言えるものと思うが、松宮さんは「筆勢溢れんばかり」のこの作品に「儒教道徳からの解放、伝統文化に抑圧された感情の解放」を読み取り、「歓喜を感じさせるイデオロギーの書」だと断じている。一九三五年に書かれたこの詩が、建国後に書写され、複製美術品として大量に流布した（私も刺繍されたこの書を所蔵している）ことを「過剰な演出」と呼び、「プロパガンダの性格をになって書された」と推測している。このような評価には戸惑いも感じるが、同時にこれまで思いもしなかったこういう鑑賞の視点に書の研究の奥深さと、松宮さんの今後の研究方向を垣間見た気がした。素人の感想である。

藤田梨那　著『詩人郭沫若と日本』
武蔵野書院／２０１７年９月／３２６頁／３９００円



著者については紹介の必要はないだろう。郭沫若の孫娘であり、当研究会の発起人の一人で副会長。国際郭沫若研究会長。郭沫若研究の分野では、いまや最も活躍する研究者である。

本書はそのような存在である著者による祖父・郭沫若の伝記研究である。内容は濃い。だが郭沫若の孫娘という著者の出自から本書の内容を推測することはやめた方がいい。本書の帯に「郭沫若と日本との20年におよぶかかわりを考究する」とある。あくまで客観的な「考究」の書なのである。だが、では冷静客観的なだけの伝記研究かと言えば、違う。

最終章で著者ははじめて自分が「郭沫若の孫」と明かしているが、その最終章には肉親の立場が自然ににじみ出ているように想う。そこには抗日戦開始とともに妻子を棄てて帰国した郭沫若と、夫に去られ必死で子供たちを養育する妻、著者の祖母・佐藤富子の生活上の苦闘や、抗戦勝利後夫に会うため子供たちを連れて香港に向かった姿が書かれている。富子は香港で郭がすでに再婚し、子どもまでいることを初めて知るのだが、その辺りの記述には著者の肉親を想う情が言外にあふれていて、胸を打たれた。

全体を概観していただくために以下に目次を掲げる。

第一章　少年時代、第二章　日本留学時代、第三章　古典文学の素養と古典詩創作、第四章『女神』の世界　第五章　小説創作の試み、第六章　日本への亡命、第七章　亡命期の作品、第八章　日本―第二の故郷

ここで書いておきたいのは、本書が他人の研究成果を切り貼りしただけの、単なるパッチワーク的な概説書ではなく、著者の長年にわたる研究を下敷きにしているということである。第二章は郭沫若が留学時代に四川の実家に送った書簡集『桜花書簡』の翻訳が、第三章以下にもいずれも記述を裏付ける研究論文があり、第四章は『女神』の全訳や、作品についての鑑賞、論文を基礎としている。著者は近年、柄谷行人に傾倒しているようだが、その影響は『女神』を論ずる視点にも強い影を落としていて、第四章にはその効果を感じる。第七章も然りである。積年の研究の蓄積の上に書かれた、日本ではじめて書かれた本格的な郭沫若伝である。

本書に一つだけ注文をつけるとするならば、建国後の郭沫若や、詩人以外の、苦悩する知識人としての郭沫若についても、是非章を割いてほしかったということである。郭沫若の全体像は、それらの評価を抜きに、全面的なものにならないと思うからだ。

本書には、別に専門家によるちゃんとした書評が書かれる必要があると思うが、出版を喜び、ひとまず拙い紹介の筆を執った。本書が多くの読者を得、郭沫若研究がますます広がり進むことを望む。

郭沫若と釣魚城懐古について

齊藤　孝治

まず最初に「郭沫若研究會報」（第一七号）で記述した七言律詩の創作の経緯について書きたい、と思う。

意外にも、創作は一九四二年六月一日、郭沫若が重慶市内から西北に約四一キロメートルも離れた北碚に出掛けたことから始まったのである。

その北碚は、当時、一帯の三八郷鎮と共に「嘉陵江三峡郷村建設実験区」を形成していた。

この嘉陵江三峡郷村建設実験区とは、同区内の町づくりや医療衛生、環境の現代化ばかりか、峡谷に潜む匪賊の絶滅を目論むものであった。

と同時に一帯の内、北碚は、重慶が抗日戦争中、日本空軍機の猛爆を受けたために実質上、重慶の遷都（中国では陪都と言う）にもなっていたのである。

ちなみに重慶市の民防弁公室によると、掌握出来る範囲内ながら日本空軍機による爆撃は、一九三八年から一九四三年に至るまでの約六年間で二〇三回もあり、その被害は焼失、損壊した家屋一七、四五二棟、部屋数三七、一八二間、死傷者約二五、〇〇〇人に及んだ、としている。

その被害でとくにひどかったのは、一九三九年五月三、四日の二日にわたる爆撃によるものであったが、一九四一年六月五日夜、市の中心部に所在したトンネル式防空壕で発生した窒息死事件であり、極めて悲惨な出来事だったため詳細に述べたい、と思う。

悲惨な窒息事故があった防空壕の入口

この悲惨な事件が起きた防空壕は、小高い岩山の地底をトンネル式に掘削して造ったもので、当時、その入口一帯は、重慶市中区十八梯石炭市路口と称していた。

現在は、渝中区磁器街にあたる。

ところでその建設は、一九三七年八月一三日、日本軍が第二次上海事変を引き起こして上海を攻略し、戦線が長江に沿い、杭州、南京、武漢と遡上したことが背景にあった。

国民政府としては早晩、重慶が日本軍の攻撃を受けるのは必至、と見做したからである。

その防空壕の建設は、戦線の伸長に伴って着々と進められたが、一九四〇年の時点ではすでに完成していた。

防空壕は、入口は狭く、やや行ったところで下に向かう階段が出来ており、下り切ったところはカーブになっていて、そこを曲がると今度は避難民を収容するスペースが形成されていた。

そこは長さ約二千メートル、高さ約二メートルの蒲鉾型で、中はゆったりとして広かった。

両側には、壁に沿って背のない木製の長椅子が長々と続いていた。

重慶市の民防弁公室によると、防空壕の収容能力は約五千人であった、という。

さらに収容スペースの端は枝分かれしており、三つの出口が出来ていた。

防空壕の建設当時、国民政府では、この防空壕のことを「絶対安全」と自負していたのである。

しかしながら防空壕には通風、防火、防毒設備がないだけでなく医薬品も用意されていなかった。

そればかりか電灯もなく、代わりに油灯が三、四〇メートル間隔で置かれていたが、万が一、壕内で火災が発生した場合、大事に至る恐れも十分、考えられたのである。

そうした中、前述の一九四一年六月五日、日本空軍機による猛爆

が敢行された。
重慶市の民防弁公室によると、爆撃は、日本空軍機二四機が約五時間、三回にわたり行なわれた、という。
当然、そのうちの何発かが防空壕の入口近くに投下されたのである。
壕内に避難している人々は、相次ぐ爆弾投下による爆音に恐怖心も手伝ってパニック状態に陥り、我先にと入口や出口に殺到したため、将棋倒しになったのは言わずもがなだった。
加えてそうした混乱の中で油灯も消え、真っ暗闇になった結果、パニック状態に輪を掛けたことは想像に固くない。
そうした状況を重慶市の民防弁公室では「惨不忍睹的避難民衆窒息、践踏惨案」(避難民の窒息し、踏み倒された惨状は見るに忍び難い程酷かった)としているのである。
死傷者数は諸説紛々だが「二、五〇〇人前後」というのが定説になっている。
こうした緊急事態に国民政府では、学校、博物館など教育施設や国にとって重要な人たちを北碚に疎開させたのである。
主だったところでは、教育施設の場合、復旦大学、西南師範大学、西南農業大学、西南師範大学附属中学、重慶市朝陽中学、中国西部科学院などがあり、重要な人たちは、作家の老舎、林語堂、巴金、哲学者の梁漱溟らだった。
そんな状況に対し人々は北碚のことを「遷都の遷都」と揶揄したのである。
以上のことからも分かるように、その北碚で集会や公演などが行なわれるようになったのは、ごく自然な成り行きであった。
冒頭でふれた郭沫若の北碚行きは、そうした流れの中で当日午後、同地で劇団「中華劇藝社」(応雲衛社長)が催す戯曲「天国春秋」の初舞台を観劇するためだった。

合州に避難していた老舎の旧居

しかも戯曲の作者が日本留学時からの友人で、創造社の同人、陽翰笙であることも北碚行きを倍加させた。
ちなみにこの「天国春秋」は、清末、咸豊帝の頃、一時的に誕生した太平天国で起きた「楊韋事件」を題材にした六幕物の歴史劇である。
この「楊韋事件」の「楊韋」とは、太平天国の指導者であり「天王」と称した洪秀全の下で天国の一翼を担っていた東王楊秀清と北王韋昌耀のことを言い、二人は兼がね洪秀全の寵を競う一方、主導権争いを行なうほか女性問題も絡むなど対立関係にあった。
そうした中、一八五八年九月初め、首都南京を押さえていた楊秀清は、東王府で祝宴を開いたが、その折、招きを受けた韋昌耀は虚を突き、隙に乗じて自ら楊秀清を刺殺した上で周囲に火を点け、楊秀清の部下ら多数を虐殺したのである。
陽翰笙は、是非は別にして韋昌耀のことを野心家、陰謀家と見做していた。
しかしながらこの事件は、さらに太平天国内の主導権争いに拍車をかけるばかりかイギリス、フランス、アメリカなど外国勢力の介入を招き、結局、一八六四年、太平天国は鎮圧され、崩壊した。
しかし太平天国は、民族主義的、革命的性格を持ち、その後の民族運動、革命運動に大きな影響を与えたのである。
ところで陽翰笙が「天国春秋」を創作したのは、上演の前年にあたる一九四一年、安徽省南部で起きた皖南事変が直接的なきっかけであった。
この事変は、同年一月六日、共産党軍の新四軍(軍長葉挺、副軍長項英)の兵約九、〇〇〇人が黄河以北に向けて移動中、安徽省茂林(現同省涇県茂林鎮)で待ち伏せしていた八〇、〇〇〇人にも及ぶ国民党軍第三戦区軍(司令長官顧祝同)の兵士に包囲され、七日間にわたる戦闘の末、約二、〇〇〇人は脱出出来たものの、約二、〇〇〇人は戦死し、約四、〇〇〇人が捕虜になった大惨事を言う。

その際、葉挺は捕虜になり、項英、副参謀長周子昆は、部下に裏切られて殺され、政治部主任袁国平は戦死した。

当然のことながら陽翰笙は、包囲を命じた蔣介石や事変を実行した責任者顧祝同らに対して悲憤慷慨し、対日統一戦線を無為にするだけでなく、内戦を深化させ一般の民衆に塗炭の苦しみを与えるものだ、と認識したのである。

だが舞台で直接、蔣介石、顧祝同らを批判、非難することは、逆に彼らの反発を招き、弾劾を受けるため陽翰笙は、太平天国を崩壊に導いた「楊韋事件」に事寄せ、彼らを批判、非難する手法を採ったのだった。

古来、中国の作家が常套的に使う「借古諷今」の手法である。

「借古諷今」といえば、中華劇藝社の理事でもある劇作家の陳白尘も太平天国で一九歳という若さながら神出鬼没の戦略家として千軍を統率しながら三二歳の時、逍遥として死に就いた石達開を題材にした戯曲「翼王石達開」を書いていた。

前後して郭沫若が戯曲「屈原」「棠棣之花」「孔雀胆」「高漸離」などを創ったのも同じ手法によるものであった。

こうした方向性は、皖南事変に象徴されるように蔣介石や国民党が抗日統一戦線を乱し、破壊しつつあることに対して共産党、とくに周恩来が統括、指導する同党南方局の政治的な戦略に基づいていたのである。

さて肝心の郭沫若の北碚への案内役は、嘉陵江三峡郷村建設実験区の区長盧子英であった。

彼は、北碚を含む合州県(現重慶市合川区)の出身で、一九二五年、国民党の幹部養成学校、黄埔軍校(四期生)に入校しながら同年、共産党と不即不離の関係にある社会主義青年団に加入し、さらに翌年六月には同校を辞めて故郷に戻り、もっぱら町おこし運動に従事していた。

郭沫若は、六月一日朝、その彼の案内で重慶城内から嘉陵江などの水路を使って北碚に向かい、午後には現地に到着したのである。

当日夕刻から催された中華劇藝社による「天国春秋」の舞台は、案内役の盧子英は元より前述の陳白尘や友人である劇作家の夏衍、散文家の徐迟、映画監督の沙蒙らと一緒に観劇した。

郭沫若は、中華劇藝社の社長でもある応雲衛が監督を務め、耿震が主役の「東王」を演ずる舞台に十分、堪能したのである。

その夜、郭沫若は北碚に泊まった、翌二日は北碚から北東に約一二〇キロメートル行った中国有数の観光地、華鎣山に出掛ける予定にしていた。

ちなみに華鎣山は、九峰三支脈から成り、山岳地には珍しい石林、洞窟や杉、檜を主とした原生林、黒龍峡に代表される渓流などがあるほか、パンダの生息地としても知られている。

ついでに言うと華鎣山では、周恩来の意を受けて中国共産党の機関紙「新華日報」が内々で印刷されていた、という秘話がある。

ところが盧子英が南宋時代、三十六年間もモンゴルの侵攻に抵抗した北碚に近い合州釣魚城に行くことを提案してきたのである。

彼としては、その抵抗の姿勢が「抗日戦争中」という時宜に合い、郭沫若も同意してくれるものと推察したからに他ならなかった。

それに地元出身の盧子英は、釣魚城の歴史を熟知していたのである。

歴史家でもある郭沫若が反対する理由はなかったのだ。

こうして急転直下、行くことになった合州釣魚城は、北碚より北西に三〇キロメートル程上ったところに所在していた。

山上に構える城は、嘉陵江、渠河、涪河に面していて、文字通り要害の地にあった。

そもそも釣魚城が築城を本格化させたのは、一二四三年、南宋の

戯曲「天國春秋」が上演された劇場跡

淳祐三年のことで、四川安撫制置使兼重慶知府が余玠の時だった。

というのも一二三九年から一二四二年にかけ彭大河が四川安撫制置副使の頃、築城が遅々として進んでいなかったのである。

直接的には播州(現貴州省遵義市)の愛国志士、冉璡、冉璞兄弟の建議によるものであった。

冉璡、冉璞兄弟としては、西進を続けるモンゴル軍が一二三九年、重慶を攻め始めて以来、侵攻の動きが目立ち始めたため四川の将来に危惧を抱いたからに他ならなかった。

同時に一二三九年から一二四二年にかけ彭大河が四川安撫制置副使の頃、築城が遅々として進んでいなかったことも背景としてあった。

そうした状況を受け、冉璡、冉璞兄弟の心意気と能力を買った余玠は、彼らを自分の幕僚に入れて釣魚城の築城を本格化させる一方、合州の州府も合州から釣魚城に移動した。

そして自らは軍を率いて興元(現陝西省漢中市)を占領しているモンゴル軍を攻略した後、西に転じて嘉定府(現四川省楽山市)でモンゴル軍と一戦を交えるなどモンゴル軍の西進阻止に務めたのである。

その間、余玠から釣魚城死守を任されていた冉璡、冉璞兄弟は、力を合わせ嘉陵江、渠河、涪河の水を城の内外に引き入れて田畑に利用したり、一〇の池を造って魚の養殖を行なったりするほか、七七の井戸を造って飲料水を調達出来るようにするなどし、一七万軍民の生活維持に万全を期した。

その功が宋の朝廷に認められるのは早く、冉璡は合州の知州、冉璞は通判(副知事のこと)に任じられ、二人は共に退任する一二五四年まで職務を全うしたのである。

釣魚城から眼下に望んだ嘉陵江

冉璡、冉璞の後任は王賢、張珏であった。

その前任は、王賢の場合、四川宣撫使兼夔州(現重慶市奉節県)知州の下で同州の軍政長官、団練使であったが、その団練使には一二五二年正月、興元(現陝西省漢中市)でモンゴル軍との戦闘の折、軍功を立てたことにより就いていたのである。

また張珏の前任は、釣魚城で中軍の長、都統制だった。

彼は鳳州(現陝西省鳳県)出身ながら初任地は釣魚城であり、同城のことは隅から隅まで熟知していて通判としては「適任者中の適任者」だった。

彼らは力を合わせ、冉璡、冉璞兄弟が築き上げた釣魚城の守りを一層強固なものにしたのである。

その際、とくに顕著な事例は、城を内城、外城に分けるほか、内城の入口に護国門、青華門、東新門など八つの城門を造った点だった。

一方、南宋攻略を目指すモンゴル帝国の第四代皇帝モンケ(蒙哥)は、一二五八年、本格化させたのである。

いうまでもなく彼の最終目標は、南宋の首都臨安(現江蘇省杭州)を攻め落とすことであった。

南宋軍がモンゴル戦に使用した投石機の模型

彼はその方策として四方面から包囲挟撃する戦術を採ったのである。

詳細に説明すると、すでに雲南の大理を攻略している弟フビライ(忽必烈)には長江の要衝の地鄂州(現武漢市武昌区)に軍を向かわせ、ジンギスカン(成吉思汗

の弟テムゲ(鉄木哥)の孫タガチャル(塔察爾)、漢人の大将李璮などには宋軍の分断を計るために淮河の南北攻略を命じ、大将のウリアンカダイ(兀良哈台)には雲南出兵を要請し、さらに自分自身は主力の兵を率いて四川奪取を目論む、というものだった。

そしてこれらの戦術が成功した暁には、全軍が一緒になって臨安攻略に向かうことにしていたのである。

肝心の釣魚城攻略は、四万もの兵から成るモンケの親軍によって敢行された。

破竹の勢いで四川に侵入してきた彼らは、三月には成都を掌中に収め、年末には悠々と重慶に迫ったのである。

まずモンケは、例によって漢人の晋国宝を王賢の元に送り、服属を要求した。

これに対し王賢は、その要求を強硬に拒絶するばかりか晋国宝を斬首したのである。

当然のことながら激怒したモンケは、翌一二五九年二月二日、釣魚城攻略を開始した。

取りあえず彼は、釣魚城を外界と遮断し、孤立させることにしたのである。

そして先鞭隊を送り外周の礼儀山城、平梁山城、合州旧城の攻略を図った。

さらに兵の糧秣や軍の備品の釣魚城への搬入を断つため腹心の鈕璘に対して長江を重慶より三〇〇キロメートル程下った夔州一帯の攻略を速やかに行なうよう命じたのである。

攻略は、いずれも成功したが、とくに合州旧城を攻めた汪徳臣の軍は、駐屯兵を含む一般の人々約八万人を捕虜にした程だった。

勢いに乗じたモンケは、指揮官である都総領李忽蘭吉などが率いる戦艦約二〇〇隻を急遽、嘉陵江を遡上させて釣魚城下に派遣し、係留中の南宋軍の運搬船約四〇〇隻を拿捕する挙に出たのである。

釣魚城の外界を遮断したモンケは、慎重にも今度は同城の周りに日干し煉瓦や土嚢を使って塀を築くほか、前述の李忽蘭吉には嘉陵江上に浮き橋を造り、浮かせるなどして水上封鎖の責任を負わせた。

こうして釣魚城攻略を万端整えたモンケは、三月一日、全軍に対し釣魚城突入を命じたのである。

しかしながら彼らの猛攻撃にも関らず、釣魚城は陥落する気配を微塵も見せなかった。

そのことについて合州志には「依然物資充裕、守軍闘志昂揚」と書かれている。

しかも四月三日から約二〇日間、一帯は雷雨混じりの悪天候が続き、このこともモンゴル軍の士気に少なからず影響したのである。

業を煮やしたモンケは、雨上がりを待ち、四月二二日、二四日の両日、自ら率先して選りすぐった精鋭と共に護国門から城内へ突入を図ったのだ。

しかし南宋軍の守りは強固であり、結局、必死の突撃も失敗に終わったのである。

一向に攻略の目途が立たない状況に側近中の側近で、皇室担当大臣である宿衛大臣術速忽は死を賭けて「川蜀之地、三分我有其二、所未附者巴江以下數十州而已、地削勢弱、兵糧皆仰給東南、故死守以抗我師。蜀地岩險、重慶、合州又其藩屏、皆新築之城、依險為固、今頓兵堅城之下、未見其利」と直言したのだ。

だが剛直なモンケは、術速忽の諫言にも耳を貸さなかったのである。

そうした状況下、モンケが片腕として信頼を寄せていた大将の汪徳臣が秘かに伏せっていた釣魚城近くの縉雲山寺の廟内で病没した。

その死は、局面を打開しようとして大雨の中を単身、騎乗から城内に対し投降を呼び掛けたことが原因で風邪をひいたため、とされている。

この大黒柱の死は、モンケにとり精神的な大打撃であった。

それでも彼は、釣魚城攻略を諦めず、自ら全軍の先頭に立つ決意を固めたのである。

しかし驚くべきことにモンケは、八月一一日、急逝したのだ。

死因は、戦死説、病死説があり、学問上、現在も明確な結論は出ていない。

例えば合州志は「蒙哥(モンケ)在合州釣魚山一役中被南宋軍投石機的一顆巨石打中、六天以後傷重而亡」と戦死説であり、反対に元史は「天氣多雨、蒙哥身體不適、於農暦七月葵亥日死在釣魚山」と病死説を採っている。

そのモンケは死の直前、「若克此城、當盡之」(もしこの城を陥せば、悉く殺戮し尽くせ)との遺言を残していた、という。

不慮とはいえ釣魚城攻略が出来なかったモンゴル軍は、同城の宋軍を牽制するため約三〇〇〇人の兵を残し、主力は一帯から撤退、重慶などに移動したのである。

一方、曲がりなりにも〝軍功〟のあった王賢は寧遠軍節度使に昇格すると共に護国伯の栄に浴した。

また王賢を支え続けた張珏は、彼の後任に就いたのである。

片やモンゴル帝国では、モンケの逝去後、皇帝の座を巡りフビライと七弟アリグブケ(阿里不哥)との間で権力闘争が起きた。

というのも事はまず、モンゴル帝国の首都カラコルム(現モンゴル共和国カラコルム市)でモンケの留守を預かっていたアリグブケが重臣らの推戴を受け、モンケの後継者に指名されたことに端を発したのである。

しかし実力に優る兄のフビライが容認するはずはなかった。

翌一二六〇年五月、一方的にモンゴル高原南部の開平(現内モンゴル自治区シリンゴル盟正藍旗南部)でクリルタイを開いて大ハン(大汗)の位に就く一方、世祖を名乗り、国号を元と定め、国都を金の古都、燕京(現北京)に置くことにしたのである。

だがアリグブケもそれに対抗して直ちにクリルタイを開き、大ハンに就いたため事は一層、紛糾、激化した。

やがて激しい対立は戦争となり、四年間続いたが、一二六四年八月アリグブケの降伏によってフビライの勝利に終わったのである。

その勝利は戦力、士気の差もさることながら「フビライの食糧など経済封鎖が功を奏したため」と合州志には書かれている。

こうしてフビライは同年、国都燕京を中都と改称するほか年号も至元と改め、国名も元とし、正式に発足させたのである。

とはいえ四年間にわたるモンゴル帝国の内紛は、結果的に釣魚城など一帯に平和と安泰をもたらしたのだ。

栄転した王賢の跡を継いだ張珏は、それをモンゴル軍の侵攻によって荒れ果てた釣魚城など一帯を修復する絶好のチャンス、として捉え、積極的に対処したのである。

そのことについて合州志は簡単ながら「生産農業、訓練士兵、修整兵器」と書いている。

彼の姿勢は、合州志によると「管理厳格、賞罰分明も、立功即使是罪犯也重賞、犯過雖是至親也絶不寛容」であった、という。

同時に一二六六年、張珏は、モンゴル軍によって奪われていた興元府(現陝西省漢中市)、利州(現四川省広元市)に自ら軍を率いて出兵し、失地回復を図り、実現したのである。

こうした彼の対応について合州志は、「人人奮発、公私皆足」と記されている。

片や同年、ライバルのアリグブケが逝去したことなどもあり、皇帝の座が安泰になったフビライは、その年の四月から四川攻略を再開したのである。

しかしながら張珏ら南宋軍の抵抗は、人々の支援を受けて強固なものの、モンゴル軍の侵略の勢いも激烈を極め、一二七五年の時点で四川で落城しない城は重慶、瀘州、釣魚の三城を残すのみとなった。

何かと張珏に依存していた南宋の恭帝趙顕は、二月には張珏を寧遠軍節度使に昇格させ、五月には四川創置副使兼重慶知府に任じたのである。

そればかりかさらにその直後には、首都臨安の保衛のため至急、軍を率いて入京するよう勅令を発したのだ。

臨安保衛は、寧遠軍節度使の任務でもあったからである。

だがしかし、この勅令は臨安と四川の間がモンゴル軍によって完全に遮断されていたために届かなかった。
すでに南宋は〝風前の灯〟と化していたのである。
一方、四川の完全制圧を目論むフビライは、とくに重慶攻略に狙いを定めた。
南宋軍、モンゴル軍の攻防が繰り返される中、勢いのあるモンゴル軍は、重慶に近い嘉定府(現四川省楽山市)や万州(現同省重慶市万州区)、渠州(現同省同市渠州県)、涪州(現同省同市涪陵区)、開州(現同省同市開県)、瀘州(現同省瀘州市)などを次々と攻略し、重慶包囲網を作って行った。
しかし南宋軍も敗退するだけではなかった。
重慶、釣魚城間を行き来し、指揮に当っていた張珏は、翌一二七六年六月、腹心の王立を釣魚城から瀘州に向かわせたのである。
瀘州は重慶城の西の玄関口にあたり、戦略上、極めて重要なところだった。期待に応えた王立は、部下を激励、督促し、激烈な戦闘の末、瀘州を奪還するばかりか、モンゴル軍の守将熊耳、モンゴルに降った元南宋軍の将梅応春らを殺害するほか、その家族らも捕虜にするなど軍功を挙げた
その家族の中に中国の歴史をも左右した、と喧伝されている熊耳夫人がいたのである。
彼女については、郭沫若の七律「釣魚城懐古」にも登場するので、その出自について詳細に記したい、と思う。
この熊耳夫人のことは、調べた範囲内で彼女の両親、本人の姓名さえはっきりしなかったが、宋史などには「彼女の異父兄はフビライの重臣、李徳輝である」と書かれている。
それによると、李徳輝は、通州潞県(現北京市通州区)の人で、若くして学識深淵で人格高邁な点がフビライに買われ、彼の二男で皇太子チンキム(真金)のご学友とも言うべき「侍読」に取り立てられたのが出世の始まりだった。
その後、さらに昇格し、今度は安西王相兼西川枢密院副使に任じられたのである。
安西王相とはフビライの三男、安西王マンガラ(忙哥勅)に関わる業務を統括する王府の長のことであり、西川枢密院副使とは陝西、四川両省の軍事政治について両省の上に立ち統括する機構、つまり同院でトップの枢密使に次ぐ次席のことを言う。
こうした重責からも分かるように、李徳輝はフビライから極めて高い親任を得ていたのである。
そうした状況を受け、熊耳夫人は幼少の頃から兄の李徳輝に連れられて安西王府に出入りしており、安西王と顔を合わせることが度々だった。
前述の宋史などによると、熊耳夫人は「乖巧玲瓏、聰明伶俐、知書達理」であった、とされている。
この熊耳夫人の才色兼備ぶりが気に入った安西王は、やがて自分の衛士、熊耳に娶わせたのである。
以来、彼女は南宋との戦いの中で熊耳に連れ添うのが常だった。
王立に囚われた時、彼女は、夫への愛と我が身を護るため出自については一切、隠した。
そして王立らの取り調べに対し熊耳夫人は、自分の姓は「王」と称し、「私は元々、南宋の将、牛乾の妻でした。夫がモンゴル軍との戦いに敗れて殉死し、熊耳に無理矢理妻にさせられたのです」と偽ったのである。
熊耳夫人の言葉を信用するだけでなく、その美貌と才智を買った王立は、彼女を釣魚城に連れて来、その後、母親の侍女にし、周囲には彼女を自分の義妹、と言い繕ったのだ。
他方、一向に陥落しない重慶に業を煮やしたフビライは、年末、攻略の将をすげ替え、併せて兵員も増強して攻略を再開したのである。
この再開は、直前に首都臨安がモングル軍の大将バガン(伯顔)の猛攻によって陥落し、事実上、南宋が滅亡したことも少なからず影響していた。

新たに投入された将は、南宋軍の内情を熟知している投降の漢人の武将張徳潤や一二七四年八月、日本侵略(文永の役)に失敗して帰国したばかりのモンゴル人の武将都元帥クドン(忽敦)、嘉定府攻略などで軍功があったモンゴル人のヤストゥル(也速答兒)らであった。

彼らは長期戦を前提にしてやはり重慶包囲網を採ったのである。

要するに〝兵糧攻め〟だった。

同時にその外堀を埋めるため周辺にある南宋軍支配下の城攻めも敢行したが、その一つには瀘州城の奪還があった。

この瀘州城奪還は、王立が同城を取り戻した約一年半後、つまり一二七七年十二月、クドンによって行なわれた。

その時、クドンは約二万の大軍を率いて攻め込んだが、その猛攻の前に城は陥落し、守将の王世昌は自決して果てたのである。

その陥落は、長年にわたる宋とモンゴルとの戦闘で城内が「糧食尽浄、人們互相吃人」(食糧をきれいに食べ尽し、人々はお互いを食べ合っていた)という状況にあったためである、と瀘州志には書かれている。

そうした悲惨な状況は、重慶城の場合も大なり小なり同じであった。

何とか包囲網を打ち破りたい張珏は、翌一二七八年に入ると、総管李義など選りすぐった武将に包囲網突破を命じたが、勇猛なモンゴル軍によって撃退され、いずれも失敗に帰したのである。

思い余った彼は、同年一一月、親衛軍を率いて出撃したものの、長江東岸の扶桑坦(現重慶市江北区五宝鎮)でヤストゥルの軍と戦闘となり、大敗を喫したのだ。

重慶城に帰投した張珏に対し幕僚の劉安はモングル軍への投降を勧めたが、張珏は頑として聞き入れなかった。

こうした状況から張珏への説得を諦めた劉安はその後、秘かに側近の韓忠顕と計らい西門を開いてヤストゥルの軍を城内に引き入れ、投降した。

孤立した張珏は、一部の親衛軍を引き連れ船で長江を培州へと逃れたが、途中、ヤストゥル鼻下の武将チムール(鉄木児)に捕まったのである。

そしてフビライがいる大都(現北京)に護送中、安西の趙老庵(現河南省安陽県林州市)で護衛のすきを見て自刎したのだ。

その死は、厠(かわや)で弓の弦を使って首を絞める、という壮絶なものであった。

張珏の死を哀れんだ宋の忠臣、文天祥は「氣戰萬人將、獨在天一隅、向使國不滅、功業竟何如」という五絶を創っている。

この結果、四川で残るは、とうとう釣魚城のみとなった。

しかしながらその時点ですでに釣魚城を含め四川全体が政治、経済など全ての点で疲弊し、壊滅的な状況に陥っていた。

そうした状況について「四川通史」(賈大泉、陈世松共著)には「全蜀已経残破、経済、財政、軍事、民心已経全面崩潰」と書かれているほど衰退し切っていた。

とりわけ釣魚城の場合、重慶城の落城などにより難民が押し寄せ、城内は一〇余万人もの軍民であふれる、という異常事態が発生していた。

加えて一帯は、一二四六年から翌年にかけて大干ばつがあり、すでに城内の糧秣は底をつき、元志によると「易子相食」(両親が飢えの余り自分の子供を他人の子供と交換して食べるという意味)とされる程の異常さだった。

こうした事態での釣魚城守衛は、弱冠二八歳の王立にとって余りにも大任であった。

まさに彼自身が生死の関頭に立たされていたわけである。

心痛める王立に対し熊耳夫人は、それまで隠していた自分の出自を明かした上で「南宋已経滅亡、切莫拘泥於忠君的名節、眼下救民於水火、才是真正的大義」と言って投降を勧めたのだ。

その時、熊耳夫人の異父兄李徳輝は、とくにフビライの厳命を受けて成都に設立されていた西川枢密院のトップ、知院に就任して間もなかった。

ちなみにこの西川枢密院とは、四川省西部で重慶城、釣魚城攻略などモンゴルにとり緊急事態が勃発したために便宜上、中央の枢密院の大権を委任し、代行するものであり、いわば中央の出先機関であった。

それ程、李徳輝は、フビライの親任を受けるだけでなく重責をも担わされていたのである。

この異父兄のことが頭にあった熊耳夫人は、王立に対し「利用李徳輝的権力来保証全城軍民的安全」と提言したのである。

こうした熊耳夫人の説得に王立は、悩みながらも城内にひしめく軍民の安全と引き換えに投降を了承したのだ。

しかし彼は体面上、「不降旗、不収兵器、不改県誌」を投降の条件にした。

これらの条件は、熊耳夫人から李徳輝を経由してフビライの元へと伝えられたのである。

これに対してフビライは、一部重臣の反対に合いながらも釣魚城内の軍民の安全と王立が出した三条件を了承した。

この了承は、フビライが幼い頃から儒学を学ぶなど漢民族の文化に傾倒しており、彼らの心情を理解していたことや釣魚城攻略によって必然的に発生する軍民の虐殺が漢民族の反発と不信を買い、以後の統治に悪影響を及ぼすのを惧(おそ)れたことが主な理由、とされている。

こうした状況を受けて王立は、翌一二七九年の正月、城門を開き、五〇〇騎の兵を率いて成都から駆け付けた李徳輝に投降したのである。

しかし二〇人程の将兵は投降を潔しとせず、自ら死を選んだ悲劇もあった。

とはいえ投降に立ち会った李徳輝は、城外から食料を調達して飢餓状態にある軍民に与えたのである。

だが反面、彼は、そうした軍民に対し城内の全ての池を土や岩石などで埋めさせたのだ。

それは、池の水が以後、田畑の用水、魚の養殖などに使用されるのを制御するためであった。

この政治的戦略的措置について合州志には「以絶後患」(禍根を絶つと同じ意味)と書かれているのである。

いうまでもなく李徳輝は、フビライの忠実な配下であると同時に冷厳な政治家だったのだ。

南宋軍が釣魚城に造った貯水池

こうして釣魚城は三六年にわたるモンゴルに対する抵抗の歴史に幕を下ろしたのである。

ところで王立と熊耳夫人のその後はどうなったのだろうか。

王立は、モンゴルに投降したことを多とし、その後、フビライから節度使に封じられたのである。

しかし宋や宋室に対する思いを捨てきれなかったのか、フビライ逝去後、六年経った一三〇一年、成宗チェンツォン(鉄穆耳)の時、宋の復興を秘かに謀ったのだ。

だが事はすぐに発覚して成宗から死を賜ったのである。

この賜死は、釣魚城落城から実に二二年も経っていた。

何とも哀れとしか言いようがない。

片や熊耳夫人の方は、歴史から完全に姿を消してしまったのである。

中国の史書には、彼女が落城後、合州にそのまま留まったのか、

或は異父兄のいる成都に行ったのか、それとも国都大都に赴いたのかは全く記載されていない。

さて郭沫若が一九四二年六月三日、「釣魚城懐古」と題する七律

魄奪蒙哥尚有城、
危崖拔地水回瀠。
冉家兄弟承璘玠、
蜀郡山河壮甲兵。
卅載孤撐天一线、
千秋共仰宋三卿。
貳臣妖婦同祠宇、
遺恨分明未可平.

釣魚城の岩肌に刻まれた郭沫若の詩文

を創ったのは、釣魚城落城から六四六年も経ってからのことだった。

その大意は次の通りである。

モンゴルの大汗、蒙哥(モンケ)は邪悪にも釣魚城の奪取を試みたが城は今もなお厳として存立している、

釣魚城は地を抜くようにして断崖絶壁の上にあるばかりか城の周りは三江の水がめぐらしていているのだ。

冉家兄弟すなわち宋末の愛国志士冉璡、冉璞兄弟は抗金の名将呉璘、呉玠兄弟の思いを承っていた、

その時、蜀の山河は凛々しく武装した壮健な兵士で満ち溢れたのである。

以後三十年、釣魚城は孤塁ながら天下を一手に支えてきた。

それ故、そのことを主導した南宋末の三卿つまり余玠、王賢、張珏を永久に一緒になり仰敬しよう。

しかしながら三卿が祀られている釣魚城護国寺の功徳祠内には宋を裏切り、秘かにモンゴルに付いていた釣魚城鎮守王立とフビライの重臣李徳輝の異母妹で、妖婦と言われながらも王立の傍らに常に侍り、仲介の労をとっていた熊耳夫人が合祀されているのだ。

このような恨み辛みは、今も明白に残っており、事は未だ平穏にはなっていないのである。

この郭沫若の七律に対する作風は、史実としての学問的な客観性は別にして当時、抗日統一戦線について国民党政権に垣間見られた投降主義的とも思われる消極的な姿勢に対するアンチテーゼがかなり意図的に込められていた、と思われる。

それは、一九九一年七月、当局が釣魚城の岩壁にこの七律を刻し、紹介した上で「一九四二年」という抗日統一戦線がもっとも苦難を極めた時期に郭沫若が王堅など三卿の英雄的行為を称賛する七律を創り、戦意高揚上、大いに役立ったことを示す石碑を建立していることからも十分、うかがえるのである。

しかしながら反面、王立、李徳輝、熊耳夫人については「彼らがフビライに投降しなければ死の直前にあった釣魚城の軍民を救えないばかりか、三六年も続いた四川の戦乱に終止符を打つことが出来なかったはずだ」とか「歴史を国家や君主を前提として観察、評価する態度、姿勢は今なお中国に残っている封建社会を『是』とする思想であり、人民、民衆を主体とする現中国の在りようとは整合しない」という意見もあるのだ。

この全く正反対の意見は、釣魚城に平和が訪れてからすでに七三〇年も経過しているにもかかわらず中国では今なお学術会議が開催されるなど議論の対象になっているのである。

次号では、この延々と続いている論争について紹介したい、と思う。

会務報告(二〇一七年六月～十二月)

17年6月20日　会報第17号発行、発送。
17年8月25日　会員に18号原稿募集の通知。
17年8月25日　ホームページに第17号アップ。
17年11月19日～25日　四川省楽山師範学院郭沫若研究センター訪日調査団三名来日。福岡は岩佐会長および武継平、呉紅華会員が、東京では藤田副会長、および斉藤孝治会員がお世話。
17年12月7日　第18号原稿コロニー印刷に入稿。
17年12月20日　第18号刊行予定

編集後記

■ようやく第18号の編集が終わり、印刷所に渡す。編集後記は間に合わず、今日中にメールで送ることになった。今号の編集には苦労した。ワープロを使うのだが、図版や写真が多く、いただいた原稿を編集しても、それを他のファイルと結合すると、原稿に図版や写真の多いファイルは変形してしまう。操作上の問題である。「ヘルプ」やネットの助言サイトを見ても、専門用語が多く、理解できない。その上、使っているパソコンはもう十年以上も前の機器で、ウインドウズ7。老人のパソコン知識や技術ではお手上げのことが多い。今日などは、数多くの危機をのりこえ、ようやく一仕事終わった、という感慨に浸るほど。

■今年3月、中国郭沫若研究会の会誌(不定期刊)『郭沫若研究』が再刊され、その第一号(総第13号、社会科学文献出版社)が送られてきた。主編は趙笑潔・郭沫若記念館館長と蔡震・中国郭沫若研究会執行会長、副主編が李斌中国郭沫若研秘書長。本号で連載が終わった魏建教授の「重識《女神》や横打会員が紹介している陳俐教授の郭沫若論も掲載されている。いずれも、郭沫若研究に新しい視野を導入した論文で、現在中国の研究水準を代表するものと思う。本誌では、同誌と連携を深めつつ、今後も新しい成果を紹介していきたい。

■本誌は純粋な研究誌ではないが、掲載するものは論文であれ、エッセイであれ、出来るだけ郭沫若像を多面的に浮き彫りにする視点をもつものをと考えている。今号掲載の論文、エッセイはいずれもそれに応えられる内容と、編集部のひそかな自負であるが、次号以降も積極的なご寄稿をおねがいしたい。

■年をとると病気にかかりやすい。郭沫若の言語について連載中の上野恵司さんのエッセイも病気で今号は休載となった。萩野脩二さんも病気を押して冰心と郭沫若を書いてくださった。もうすぐ今年も終わる。

新たな年を前に、会員諸氏の病気なき日々とご多幸をお祈りします。

郭沫若研究会報　第18号

発行日　二〇一七年十二月二〇日
発行所　日本郭沫若研究会事務局
〒八一〇-〇〇三一福岡市中央区谷二-二〇-八-三一一岩佐方
TEL〇九二-七一五-二五五四(FAX兼用)
メールアドレス　japankakuken@gmail.com
ホームページ http://www7b.biglobe.ne.jp/~guomoruo/
印刷　コロニー印刷(社会福祉法人　福岡コロニー)